
脇役

柑橘レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役

【Nコード】

N6397W

【作者名】

柑橘ルイ

【あらすじ】

文武両道、眉目秀麗、品行方正、けどむつつり助平が欠点な親友の日之下勇が勇者として召喚され、影が薄い、存在感がない、そんな八頭 晶は召喚に巻き込まれる。

異世界の神官のマリアと騎士ユナ、そして魔術師メイをつれて魔王退治にでる勇と共に旅に出るのであった。

この作品は「Arcadia」様へも投稿しております。

辛口甘口など色々な感想をくれると嬉しいです、指摘など皆様の感想を参考に試行錯誤して書いております、よろしくお願いします。

脇役一（前書き）

脇役一

校舎が赤く染まる夕暮れ時の校庭を、詰襟の学生服を着た男子高校生が歩いていった。

黒い髪に眼鏡の奥にある瞳は細く黒い普通の男子であつたが、不思議なことに周囲に居る学生達から存在されないが如く見向きもされない。

「さてと、今日は帰って何作ろうか」

のんびりと歩きながら八頭^{やず} 晶^{あき}は首を傾げ、夕食に何を作るか思考をめぐらす。

両親が共働きのため帰りが遅く、必然的に家事を一人っ子の晶がやることになるのである。

「晶！ 久々に一緒に返ろうぜ！」

晶が振り返るとそこには親友がいた。

笑顔は凜々しくそてかつこよく、ウェーブがかった赤い髪に青い瞳の整った顔立ちである。

晶と同じ詰襟学生服だがそれでも王子という雰囲気は抜けていない。

「勇か……確かフェンシングの世界大会優勝を祝うとか言ってなか

ったか？」

「彼女達が暫くしてから帰宅しろだよ」

なぜここにいるかと首を傾げる晶の言葉からそのときの状況が脳裏に浮かんだのか、日之下^{ひのした} 勇^{ゆう}は楽しげに目を細めていた。

そのとき隣のグラウンドから砂埃を巻き上げながら強風が吹き抜ける。

反射的に晶は顔を背け、砂が目に入らないよう目を閉じたが、次の瞬間にはしみじみとした勇の声を聞いて晶は呆れてため息をつく。

「白、シマシマ、黒にクマか……パンスト越しもなかなか……」

隣に居る勇を見ると口元を覆っているが、その手の中ではニヤリとしているのだろう。

「勇が下着をみているのを女子が知ったら幻滅するだろうな、いくら顔が良くてもさすがに嫌がられるぞ」

「だから分からないようにしているさ」

眉間に押さえて首を振る晶に対し勇は肩をすくめるだけであった。

文武両道、眉目秀麗、品行方正、もはや完璧といわれる勇であったが、やはり誰にも欠点がある、風が吹いたら下着を見るようなむつつり助平なのだ。

それを知っているのは晶だけであつたが、昔勇にいじめを止めてもらった恩義を感じている晶は言いふらすつもりは無かつた。

「相手に不快な思いをさせない為に、ばれない様にしたんだっけ？」

「晶と話をしている時も、他のものを見ている時も視線でだけで捉える、俺以外は出来まい」

余程自信があるのか自慢げに話す勇だつたが、無駄なことに心身を注ぐその情けない姿に、晶はなんとかならないものかと脱力すると共にため息をついていた。

「なんという能力の無駄使い」

「それはこっちが言いたい！」

晶を見る勇の瞳が光つたのは、夕日の所為ではないだろう。

「近づいても気付かれないなんて、うらやましいぞこの野郎！」

「まあ、自然に体がやるからな」

勇は握りこぶしを作るが、晶は癖だと苦笑いを浮かべる。

「お爺さんの影響だっけ？」

「そつだ、爺さんから色々教えてもらったな」

北海道で未だ現役のマタギをやっている洪く寡黙な祖父の姿が晶

の脳裏浮かぶ。

孫を可愛く思うのか晶の祖父はサバイバル技術に狩猟の仕方、果ては動物の解体方法も教えこんでいた、普段寡黙な祖父であったが狩を教える時は饒舌になり蓄えた口ひげを揺らし、楽しげに笑っていたのを晶は思い出していた。

狩猟の技術の中には獲物に気付かれない方法があったが、上手く出来ない晶は家族や友人、果ては近所の人相手に日常的に練習していたのだが、それがいつのまにか癖になってしまい影が薄くなったのである。

「あとは自然の神秘だな、それにまつわる伝説や神話、妖精や超常現象を想像したからな、おかげでファンタジー物を読み漁るようになったな」

「本やネットを読み漁るインドア派かと思いきや、サバイバルも出るアウトドア派、どっちだよってツツコミたくなる」

山々に掛かる一本の虹の感動とそれに伴う話を祖父から聞いたときの面白さは凄かったと、しみじみとする晶をよそに闊達に笑う勇であった。

「勇くん、バイバーイ」

女生徒達が勇に向かって笑顔を向けて手を振っていく。

下校時刻ゆえに帰宅する学生は多く、晶達を通り過ぎていく女生徒は皆挨拶していた、それに答えるように勇は律儀に全員に笑顔と共に手を振り返し、女生徒達は良い物を見られたとばかりに黄色い声を上げる。

それを見ていた周囲の男子生徒はケツと言わんばかりにイラついていた。

「相変わらずもてるな、幼馴染達も大変だろうに……」

「なに言っているんだ、皆ロシア人のハーフが珍しいだけだって」

そんな訳無いだろうとジト目になる晶であったが、肩をすくめる勇は本気でそう思っているのが晶には分かっていた。

それよりもと勇が顎に手を当てながら口を開く。

「俺は晶の良さが周りに知られていないのが、不思議だと思っが……」

「それはそうだろうな、存在感無いし」

むしろそれが良いと内心思っている晶は、あっけらかんと言いつつていた。

「そうか？ いまどき高校生で家事全般をほぼ完璧にこなせている、そんな奴最近いないぞ！ 俺なら絶対目を付けるさ！」

「一人暮らしに近い生活をしていたら、ごく普通に出来るようになる

るけどな……」

熱弁する勇の姿から薔薇の雰囲気を感じ取った晶は身の危険を感じ、顔を引きつらせながらゆっくりと離れていく。

「なんで離れていくんだよ」

笑いながら勇が肩を組んだ瞬間、晶達の周囲が真っ暗に染まった。

日が残っている山の頂から発せられた黒い光が、二人を照らした結果であった。一瞬の出来事であったが、そこには晶達が居た形跡は何一つ残っていないかった。

「は？」

突然視界が暗闇に閉ざされ、何が起きたか理解できない晶は呆然とするしかなかった。

「勇？」

晶は肩に掛かっていた勇の感触が消えたことにより、より不安が募った晶はまだ近くにいるかと声をかけるが返答が無かった。

何も見えない状況に晶は焦りが増し、その場にしゃがみ込む。

「落ち着け、落ち着け……どうする？ どうしたい？ なにをする

べきだ？」

不安から震える身体を抱きしめ晶は自分に言い聞かせていた。

暗い山を過ぐす猟師として祖父から教えられた事の一つであり、すこしでも冷静になるための行動だった。

「とにかく情報……なにか光、明かりがあれば……そうだ！」

未だ不安と暗闇から身体の震えは収まっていらないが、ポケットの中を震える手でまさぐり携帯を取り出す、視界を確保しようとカメラのライトを利用したのだ。

携帯が機能し画面の光で大分落ち着いた晶は電波を確認する、しかし残念なことに圏外であった。

繋がらないかと晶は落胆するが氣を持ち直し顔を上げてカメラ機能のライトで周囲を照らした。

壁と天井は四角い石で作られ正方形の飾り気の無い部屋であった。

化粧台や服がかかっていることから更衣室関係、そして部屋の雰囲気と服の装飾から何処と無く中世ヨーロッパのようであり、あまりの周辺の変化に晶は口をあけ呆然とするしかなかった。

「や……会……し……！」

いまだに現状が理解できず周囲を見回す晶だったが、竈った声が聞こえた瞬間に余計な音を立てないよう身体を硬直させる。

静寂に包まれる中でかすかに聞こえる音の方へ晶は光を向けると扉があり、晶は扉の向こうの状態を少しでも得ようと耳を押し付ける。

「勇者様！ お会いしたかったです！」

「女性？」

扉越しの窺った高めの声が聞こえ、女の声と晶は予想を立てていた。

「ちよ、ちよつと待てよ、勇者！？ いきなりなんだよ！？」

（勇！？ いるのか！？）

晶のよく知った親友の声が聞こえてきたため晶は飛び出そうと手をかける。

しかし扉の向こう側の様子と、自身に起きたことがどうなっているかよく分からない状況のため、危険が無いかと思いとどまり少し扉を開き覗き込む。

晶の居た部屋と同じ石で作られた部屋には多数の蠟燭に照らされており、そこにはおよそ二十歳前後の美女が部屋の中央で勇と向かいあっている。

美女は白地に所々青いラインが入った、全体にゆったりとした口ブの様なものを羽織っておりその姿は聖職者を思わせた。

腰まで届きそうな金髪は緩やかに波うち、瞳は黄色、目尻が下が

っついて優しげな雰囲気を感じさせる女性は、両手で勇の手を握り詰め寄り瞳は涙が零れている。

（二人だけか？）

晶は慎重に顔だけ出して周囲を見回すと勇と美女しかない判断できた。

危険がとりあえず無いと晶は一息つき、念のため用心の為に音を立てずゆっくりとした動作で中に入る。

手を握り締められ、困惑する勇は晶と視線が合い勇は驚いていたが、よく分からない状況でも美女の涙には弱いのだろう、勇は懸命に慰めているのは流石であった。

「申し訳ございません……わたしの名前はマリア・セイ・フォトン、神官をしています」

落ち着いてきたマリアは勇に頭を下げる。

涙声であったが次の瞬間には気を取り直したのか毅然としていた。

「此処はアズガルド大陸にある王都トキ、今現在魔王が現れ襲われています。魔王を倒せるのは勇者様のみ、それ故に勇者様を御呼びいたしました」

勇を見つけ大分冷静になった晶は、説明の中に勇者や魔王といった気になる単語が含まれており、その単語から顎に手を当て予想を立てる。

「なるほど、ゲームやファンタジー小説のような勇者召喚物といった感じか？」

「誰です！？」

振り替えたマリアと晶の視線が絡んだ瞬間に、晶の背中に冷や汗が流れ仰け反っていた。

美女が向けた瞳は嫌悪や憤怒といった負の感情に染まりきっていた。

「こいつは八頭晶、俺の親友だ」

勇へと顔を向けるマリアから視線が外されるとともに、晶は体が弛緩し酷く緊張していたこと自覚する。

「なんだあの目は……」

吹き出た冷や汗を拭いながら小さく呻く晶であった。

「勇者様の親友、ですか？」

マリアの値踏みするような視線を晶にむけると、緊張した様子で晶は仰け反っていた。

「勇者じゃないけど……そうだ」

わけも分からず、勇者という正直面倒くさそうな役柄に、勝手に決め付けられるのは困る勇は断ってから頷いていた。

「一人しか召喚されないはずですが……」

晶にはさほど興味が無いのか、マリアはすぐさま勇へ向き直る。

「どういうことだ？」

現状で二人いることに首を傾げるアリアに疑問に思った勇が尋ねた。

同じく晶も不思議に思っているのだろう黙って聞いていた。

「はい、昔から一定周期で魔王が出現するのですが、それに合わせて勇者様を召喚するのです。過去に四回召喚され、全て一人であつたとされています」

前にいた時の状況を思い出した勇は、あることが閃き手を叩く。

「もしかしたら一人だけ召喚されるはずだったけど、偶然晶と肩を組んだ瞬間に発動したのか!？」

「なるほど、つまりオレは巻き込まれる形で召喚された、ということか？」

なっとくした様子で晶も頷く、しかし勇には聞き捨てなら無い言葉も含まれていた。

「ちょっと待て！ 俺が勇者として召喚されたとは決まって無いだろ！？ 晶かも知れないじゃないか！」

勇者と決め付けられて困る勇は反論するが、チツチツ指を振る晶にはちよつとした根拠があようだつた。

「そいつはどうか？ 容姿的にも能力的にも、どう考えても勇しがありえん！」

「容姿も能力も関係ないだろ！」

勇は睨みながら否定するが晶いわく、勇者召喚物はカッコ良く身体および頭の能力も高いことが多いものであり、そのことが晶には勇が相応しいとした理由であつた。

「そして何より！」

関係ないと口絵を開こうとした勇に被せるように晶は声をあらげ、さも意味ありげに言葉をためる。

勢いに押され勇は黙ってしまい、つられたのかマリアも固唾を呑んでいた。

「勇が美人の願いを聞き入れないわけが無い！」

勇を指差す晶の姿は神の啓示のようであつた。

「ぐ！ それは……」

瞬間困り顔の勇とマリアが向き合う、勇はなんだかんだ言いつつも女性の願いを断る出来ないのだった。

勇は言葉に詰まり頭をフル回転させる、勇者という重みか美女の願いか、両天秤にかけ葛藤する。

「あの、勇者様は貴方です」

かしこまりながらマリアが勇の額を指差していた。

「な、なんだ？」

「刺青があるな」

勇は二人に注目され、自分の額に何かあると額を触ってみる、何も感触が無く眉を顰める勇だったが、見られない勇に晶が代わりに指摘する。

「それが勇者様である証です、いままで召喚された人物には皆額に証が現れていたそうです」

マリアは眩しいものを見るように目を細め、声はため息をつくような喋り方であった。

「い、いや、証があっても俺に勇者なんて大役が出来る器じゃない！ 残念だけど……」

「そんな！ お願いします！ 貴方しかないのです！」

マリアの願いに答えはしたいが勇者という道の事柄である、自信

が無い勇は断ったがマリアは尋常ではない必死さで勇に詰めより懇願し始めた。

「御免……」

安請け合いするわけにもいかないと勇は断った。

「まあ……それが勇の判断なら仕方ないな」

勇の答えに若干驚きの様子の晶だったが、どこか納得もしているようだった。

「何でもしますから！ この世界を！ 私を捨てないでください！」

悲しげなマリアの視線から逃げるように、勇は苦渋に満ちた顔をしながら背る。

「そう……ですか……」

顔を下に向け、力ない声と脱力しながら手を下げるマリア、その姿を見た勇は申し訳ない気分で見を伏せる。

「っ！」

晶の息を呑む声に顔を上げた勇に鳥肌が立つ、マリアから発せられる雰囲気陰鬱で真っ暗に染まっていたのだ。

「あ、アハ、アハハハハハハハ」

突如顎を上げ、天井を見上げながらマリアが唐突に笑い出した。

異質な笑いの姿に気が触れたのかと晶と勇は恐れ戦き後ろへ下がる。

「アハハ、無くなりました、何もかも、全て…… 唯一の役割さえ出来ずに…… ア、アハハ！」

「勇！ 頷いておけ！ 何かやばいぞ！」

気を取り直した晶が勇と同様に危険を感じたのか、肩を思い切り搦んで強引に目を合わせる。

「無理だつて！ さっきも言ったが——」

「だったらこつちも言ってやる！ 容姿的にも能力的にも、どう考えても勇しかありえん！ やれ！」

晶にも床を擦る足音が聞こえたのか手を止め、二人は同時に音の方に視線を向ける。

そして視界に恐怖を煽るものが入り、勇と晶は壁際まで全力で一気に下がった。

そこにはマリアがいた、笑うのを止め脱力するように手を下げジツと晶達を見ており、その瞳には何も写しておらず生気が全く無かった。

「うわ……」

身体を震わせ晶は小さく呻いている、恐ろしさの余り意図せず出

た様子あった。

それほどまでに暗い目である、目を逸らすと知らぬ間に殺される様子が脳裏に浮かび勇は視線が外せなかった。

晶が急かすように片手で揺さぶるが、恐怖の余り反応が出来ずにいると、一歩ずつゆっくり近づき手を伸ばすマリアの姿があり、正に死神であった。

「わかった！ やる！」

恐怖を吹き飛ばすように、勢いで出てしまった勇の言葉が部屋全体に響き渡った。

先ほどはやらないと言っていたが、マリアのあまりにも恐怖を煽る姿から逃れるために口走ってしまったのだ。

その瞬間マリアが二人に手を伸ばした体勢でピタリと止まり、そして瞳に生気が戻っていくのを見た。

二人は盛大に安堵のため息を漏らすと共に脱力して座り込むのであった。

「今までに無い恐怖だったな」

「ああ、そうだな」

晶が片手を差し出し、生きているのを確かめるためと理解した勇も片手を出し、しっかりと握手を交わす、二人の様子はやり遂げた感が凄まじい熱い握手であった。

「本当に勇者様になってくれますか？」

一瞬間を振るわせた晶は声の方を向く、そこには先ほどと打って変わって、元の優しい霧囲気のマリアが恐る恐る勇へ尋ねていた。

「あ、ああ、勇者とやらをやるよ、何処まで出来るかわからないけどな」

フウとため息一つつく勇は決心したのが晶には分かった。

本人はいまだ自信が無いようだったが、美女の願いを無下には出来ず、どんな状況であれ、言ったことは覆すつもりは無いのが、晶にも分かっていった。

「本当ですか！　ありがとうございます」

答えを聞いたマリアは余程嬉しいのだろう、目頭に涙を溜めて勇の手を握り締めていた。

「そういえば名乗ってなかったな、俺の名前は日之下勇だ、勇でいい、これから宜しく」

勇は女性に対する癖なのか笑顔を浮かべる、先ほどの恐怖が残っていないのかと晶は感心するばかりである。

「よ、よろしく、お願いします……あ！」

直視したマリアは顔を赤らめ恥ずかしげに俯いき、そこでずっと手を握っていたことに気が付いたのだろう、慌てて離れていた。

「あ」

晶は思わず声を上げる、視線の先ではマリアが着ているローブの裾を、自分自身で思い切り踏みつけている姿があった。当然そんな状態では体勢が持つはず無く、後ろへ倒れかけているところであった。

「わ！ うわわわわ！」

足が使えず立て直そうと試みているみたいだが、当然無理な話であり後ろへ倒れていく。

「おい！」

勇は素早く手を伸ばし抱き寄せる、さすが勇だと感心しながら晶は傍観していた、こうなることが分かっていたのだ。

「大丈夫か？」

「はい、大丈夫で……」

勇に問われマリアは答えるが途中で硬直する、勇の顔を近くで直視し優しく抱きしめられた状態だからなのだろう。

マリアの顔は瞬時に真っ赤に染まり、アウアウとよく分からない

言葉を発し、それを見ても勇は首をかしげているだけであった。

その様子を晶は気づかれない様ニヤニヤと見るばかりである。

（やっぱり何処でも勇は勇だな、異世界でもその何処かの主人公ばりのフラグ立ての早さ、楽しめそうだ……）

実は勇に惚れた女性達のゴタゴタを楽しんでいるのである。

女性達にアドバイスという形で裏から色々と手を出し、引っ掻き回すのである、勿論殴り合いなど酷くならないように調整はしていた。

「……」

「……」

「……何時まで抱きついているんだ？」

なかなか動かない二人を見かねた晶は声をかける。

「いや、マリアが離してくれなくてな」

勇は困り顔で未だ硬直しているマリアに視線を送る、しかし晶には自分から離さない理由が分かり半目になっていた。

「そう言いながらも堪能しているんだろ？」

勇は親指を立て歯が光らせ笑顔を作る、よほどいいものだったのだろう。

「まあいい……この後はどうするんだろうな？」

ため息をつきこのままでは埒が明かないと晶はマリアの肩を叩き、
いまだ顔を赤らめて硬直しているマリアの正気を取り戻させる。

「す、すすす、すみませんでした！　ごめんなさい！」

コメツキバツタの如く頭を下げるマリアに勇は気にしないと手を
ふり、これからどうするかと落ち着かせるようにゆっくりと聞いて
いた。

その辺りの女性の扱いは上手いなと思う晶であった。

「そうでした！　王が謁見の間でお待ちです、行きましょう！」

どうやらマリアは思わぬ勇との接近に意識が飛び掛っていたよう
である。

気を取り直しそのまま両開きの扉まで進むが開けず立ち止まった、
何事かと二人は首を傾げる。

「あの、この衣装は召喚用なので、着替えてきます」

恥ずかしげに顔を真っ赤に染め、そそくさとマリアが入った別の
扉に入っていく、その扉を見て晶はあっと思い浮かぶ、自身が出て
きた扉であった。

「やっぱり更衣室だったのか……」

扉がしまった直後晶は呆れ顔になった。

「勇、その姿は本気で情けないぞ」

「今は晶しかいないから気にしない、それよりも静かに……」

勇がべつたりと扉に張り付いていた、更衣室だとわかり室内の音を聞き漏らさないようにしている姿をみて、晶は肩をすくめた。

細かい装飾が施された冠をかぶり、真紅のマントを肩から掛け、口元に髭を生やして見下ろす瞳は強い意志を感じさせる、一目見ただけでも王と分かる威厳がそこにはあった。

王様が居る位置から数段下がった場所で、謁見用かはたまた神官用か白い衣装に着替えたマリアが膝を付く、晶と勇が後ろで見よう見まねで同じ体勢になっている。

「流石に物凄く注目されるな」

勇は周りに聞こえないようするためか隣にいる晶に小声で話しかけた。

晶も厳格な場所で話すのは不味いかと最小限に声を抑える。

「それは勇だから、というのもあるだろう、オレには気付いて無いみたいだからな」

謁見の間の両壁には騎士やら貴族と思わしき人達が居る、皆勇に注目するだけで一度たりとも晶へ向かなかったのである。

（勇には存在感あるからな）

目立ちたくない晶は密かにほくそえむ、さすがに存在感の無い晶でも目立つ場所では気付かれていた。

しかし容姿が良い勇が居ると注目され、存在感の無い晶はますます分かりにくくなるのである。

真正面に居る王様ですら勇を注視し、晶の存在に気がついていないのか視線を感じなかったほである。

「マリアよ、其の者が勇者か？」

天井が高く大勢居る広い謁見の間に洩い声を響かせ、王が勇を差しながら問う。

「はい王様、名を日之下勇と申します」

マリアが片膝を付きながら答えた、周囲からざわざわと囁き晶にとどく、「あれが」と希望に満ちた声と「子供じゃないか」と心配そうな声は半々といった具合である。

「静かに」

片手を上げ静止する王のたった一言で静かになる。

「では勇よ、我々の為に魔王を倒してくれるか？」

「はい！ 必ずや倒して見せましょう」

勇は明朗にかつ全員に聞こえるように声を張り上げ答えていた。そのようすに王は満足げにうなずく。

「勇者よ、この者達を連れて行け」

左右の人ごみの中から二人の女性が前に出るのを晶は視界に捉えた。

右側から出てきたのは二十代後半の大人びた女性である、腰まで届く赤い髪を首元で縛っており、凜とした顔立ちでつりあがった真紅の眼は鋭い眼光を放っている。

高い身長の体はスラリとして猫を思わせ、腰に剣を挿し、動きやすさを重視した鎧を着た騎士姿はとても凜々しい。

反対側からは晶と同じ年ぐらいの少女であった、鰐の広いトンがり帽子に黒いマント、袖口が大きく開いたローブから所々見える神秘的な白い肌の全身を覆っている。

いかにも魔術師といった姿で緑のショートカットが僅かに見え、深緑の瞳の目元に魔術的な刺青は知的な雰囲気を感じさせる、無表情だがそれでも見られるほどの美貌であった。

「騎士ユナ・キ・ロードと魔術師メイ・フォー・マグダリアだ、二人とも優秀だと自負している、本当なら最高の騎士と魔術師を宛がえるのだが、なにぶんこの国も一枚岩ではないのでな……」

苦笑する王様であつたが、晶はなんとなく理解した、どんな組織であろうと派閥は存在するものである。

「足手まといにはならぬ、協力せよ。そして神殿にて宝玉を受け取るがよい、詳しいことはマリアに聞け、では頼んだぞ」

ユナとメイを連れ謁見の間を晶達は退出し王との謁見は終了するのであつた。

脇役二

神殿といわれるだけにそこはとても神秘的な場所であった。

石で作られた円柱が立ち並び、同じ素材の天井はとても高く作られている、一番奥には半円状に浅く水が張られており、波一つ浮かばずに静寂を保ち神殿内を冷やしていた。

水が張られた半円の中心に、純白の玉を掴むような複雑な形をしている彫刻が立てられ、ステンドグラスの天窓から射す光が非常に幻想的であった。

「書物を持ってきますので、しばしお待ちくださいね」

そう言いながらマリアが勇へ笑顔を向けて別室へ向っていく、その間に鎧姿のユナと黒尽くめのメイが勇と正対する。

「改めて名乗らせて貰います。騎士のユナ・キ・ロードです、ユナと呼んで下さって結構です」

「魔術師メイ・フォー・マグダリアです……メイと呼んでください……」

ユナは勇者相手故か、はたまた騎士という立場からか折り目正しく握手を求め、メイはゆっくりと喋りながら頭を下げる。

「日之下勇だ、勇者だからってかしこまらなくていいさ、俺の方が年下だしね、これからよろしくな」

微笑を浮かべる勇を直視した二人は思わず見ほれているようであった。

それを見た晶はマリア、ユナ、メイの三つ巴になりそうな予感にやけてしまう。

その事がばれると色々と勇の観察に支障が出るので、手で口元を隠して様子を眺めていた。

「次は自分ですね」

流石にずっと黙っているわけにもいかなないと晶は顔を引き締め、初対面ということから敬語で話し頭を垂れる。

ユナとメイは怪訝な様子で晶を見たあと途端に警戒心を表した。

「貴様！ 何処から侵入した！」

ユナがすぐさま腰に差していた剣、バスタード・ソードを素早く晶の首筋に宛がい、メイは持っている節くれだった身長ほどの長さの杖を向ける。

「ええ！？ ちょ！ ちょっと！」

武器を向けられるとは思わなかった晶は、降参とばかりに素早く両手を上げた。

刃物を向けられるという事態に肝を冷やし、二人の苛烈な視線からおかしい真似すると即刻首が飛ばそうだと晶はつばを飲み込む。

「まってくれ！ メイも杖おろしくれ！」

勇がすぐさまユナを後ろから羽交い絞めにして押さえ、メイには視線で訴えているようだった。

暫く重苦しい空気が辺りを包み込む、晶がじつとして何もしないことが功を奏したのか、二人は渋々といった様子で武器を下ろすが、いまだ鞘に戻していないことから警戒は緩めていないと悟った晶は、何が切欠で又刃を向けられるのかと戦々恐々としていた。

「突然現れた…… 暗殺者が新たな人型の魔物かもしれない……」

「……いままで影薄いとか色々言われたけど、魔物まで言われたのは初めてだ……」

メイの鋭い視線と共に魔物呼ばわりされ、ショックを受けた晶はガツクリと頭を垂れるのだった。

「オレは八頭晶です、勇の親友やっています」

「親友？」

咳を一つして襟を正した晶に、ユナは勇に首を向けて真意を問いているようだった。

勇が重々しく首を縦に振り、肯定するのを見たユナとメイは武器を戻していく、なんとか危機的状況から脱した晶は一息つくのであった。

「そうだったのか、知らないとはいえ勇殿の親友に刃を向けてしま

うとは、すまなかった」

「ごめんなさい……」

「いえいえ、自分が癖で気付かれにくくしているのもありますから
申し訳ないのか頭を下げる二人に、晶は気にしないでいいと手を
振る。

「なあ晶、何時までも敬語じゃ大変だろう？ 仲間になるんだ、普
通に話せよ」

勇の台詞に晶は分かっているといないとばかりにため息をついた。

「誰とでも直ぐ打ち解けるお前と一緒にするなよ……」

「だよな？ と二人に同意を晶は求めるが、返ってきた反応は違っ
た。

「いや、勇殿の言う通りだ、普段どおりで構わない」

「同じく……」

「……まあ二人が了解したなら、普段道理にするよ」

自分だけがおかしいのかと疑問に思う晶だったが、深く考えても
意味が無いと疑問を押し込み了承するのだった。

「ところで晶殿はいつから居たのだ？」

神殿の中に既に居たことから不思議に思ったのだろう、ユナは晶に疑問を投げかける。

「最初からだけど？」

「最初……から……だと！」

晶の答えを聞いたユナは戦っていた、先ほどまで気付かなかったことに驚いているのだろう、少し眼を見開いているメイも口を開いた。

「神殿に着いた時から……？」

「ああ」

「まさか神殿に来る途中も……居た……？」

「勿論」

「もしかして……謁見の間の時も……？」

「当然」

この瞬間って結構面白かったりするよなと内心ほくそ笑みながら、メイの問いに晶はにこやかに答える。

「その時から居たのに気づかぬとは！ 騎士失格だ！」

勇が居た状況なら仕方が無いが、それでも気付かれないようにもしていたため、頬を掻き申し訳なさげに笑うばかりである。

両手両膝についてユナは物凄くショックを受けているようであり、メイも分かり難いが結構落ち込んでいるように晶には見えた。

「二人ともどうしたの？」

別室から白く分厚い本を片手に戻ってきたマリアが、ユナの姿を見て首をかしげる。

「晶殿にまったく気づいていなかった事に……ちょっとな……」

「あ……」

晶の存在感の無さを既に体感していたせいか、マリアは納得したように頷くのであった。

「さて、勇者様、宝玉はあちらです」

マリアが神殿の奥にある、水が張られた場所の縁に立ち、手を向ける。

勇は視線を向けると、そこには水面から樹木が伸び、白い玉を掴むような形をした神秘的で真つ白な石の彫刻があった。

「あの白い玉が宝玉です、勇者様のみ触れることが出来るといわれています。周りの水には特殊な魔術で勇者様でしか渡れませんので、

私達では台座に近づくことすら出来ません。勇者様お願いします」

マリアが促すが勇は若干躊躇していた。

「あれを取りに行くのか……」

特殊な魔術が施されていると聞いたため、勇は勇者の証があっても慎重にならざるをえなかった。

それでも行くしかないと気合を入れなおし縁に立ちそつと足を入れる、非常に浅く作られていた水面に波紋が広がるが何も起きる様子は無い。

勇は安堵のため息をつくが、まだなにかるのかもしれないと身長に水面を歩く、しかし何も起こることも無く無事に彫刻の元にたどり着く。

「そうか……何も起きない……か……」

勇者と確実に決まったことが感慨深く、心の中で決意を新たにした勇は目を閉じ、一つうなずく、そして躊躇することなく宝玉を抜き取った。

「何事も無く取れてよかったな」

戻ってきた勇に晶は賞賛を送る。

「そうだな、しかし実際これに勇者以外が入ったらどうなるんだろ
うな？」

ふと勇は疑問を口にする、同じことを考えていたのか晶は縁に立ち水面を見下ろしていた。

「水に魔術がかかっている、ということだけど……どんな物なんだ？」

勇は首をかしげながらマリアに尋ねる、その間に晶は水面を見下ろして目を凝らしているが、勇から見てもとても浅く清んだ水でしかなかった。

「それは……」

「……それは？」

マリアが口ごもる、その様子をみた勇はそこまで危険だったのかと冷や汗をかいていた。

何事も無かったとはいえ、言うのを憚られるほどに危険な場所を通ったのだ、肝を冷やすのも無理は無いことである。

「……神聖で誰も触ろうとしませんから、実は分からないのです」

「わからないのかよ！」

テヘツと小さく舌を出すマリアに勇は手の甲でツツコミを入れるのだった。

「入って見たらどうだ？　もしかしたら、お前も勇者かもしれんぞぞ？」

勇が冗談交じりに促すが晶は馬鹿言うなと手を振った。

「どういうことだ？」

ユナが怪訝な面持ちで勇に問いかける、召喚時に居なかったのだ当然の質問だろう、勇は召喚された時のことを掻い摘んで説明した。

「つまり晶も勇者である、という可能性は無いとは言い切れない」

証はないが、召喚されたことには変わりはないと勇は胸を張る。

「何度も言うけどそれはあり得ないって、なんだったら聞いてみるか？ お三方、オレと勇どちらが勇者に相応しいと思う？」

客観的にも判断してもらうのが一番だと思ったのか晶は女性三人に問いかけ、その答えとしてビシ！ と三人揃って勇を指差すのだった。

「ほら見る、自分の立ち位置は弁えているつもりだ」

「いやいや、それは皆の意見であって決まった訳じゃないぞ！」

「お前ほどの男が選ばれるのは当然として、オレは勇者になれる要素は欠片もないわ！」

「勝手に決めるな！」

売り言葉に買い言葉、晶と勇は言葉を荒げだんだんと白熱していく。

「分かった！ だったら男らしくコイツでどちらが行くか決めようか、俺が勝ったら行けよ！」

勇は獰猛な笑みを浮かべながら拳を握り突き出した。

「いいぜ！ 後悔するなよ！」

その意味を理解した晶も鼻で笑うと拳と掌を打ち合わせた。

「ちょっとまって！ 二人ともやめ——」

口喧嘩程度だと傍観していた三人だったが、突然始まった状況がまずいと判断したのだろう、ユナが止めに入ったが残念なことにすでに手遅れであった。

二人は構え、緊迫した空気が周りを包み込む、まさに一触即発であった。

「ジャン！」

晶が声を張り上げ。

「ケン！」

勇が裂帛の気合とともに叫ぶ。

「「ポン！」」

余りの展開についていけないのだろう、呆然となるマリア達三人である。

「ば、馬鹿な！ オレの豪熱マシンガンパンチ（グー）が負けるとは！」

「フフン！ 俺の爆熱ゴッドフィンガー（パー）は不敗だ！」

膝を付きシヨックと絶望感に震える晶の顔を尻目に、勇は勝利した開いた手を天高く掲げる。

「紛らわしい！」

スパアアアアアン！

勇はユナがいつの間にか手にしたハリセンの衝撃を受け、同じく晶も後頭部を叩かれている、しかし二人はいいツツコミだと親指を立てる姿は非常に清々しかった。

「まあ冗談はさておき、正直気にはなるな」

「そつだな、でも危険を冒してまで調べる意味は無いな」

勇に同意しながら晶は水面を観察し始める。

「得体の知れない魔法生物がいて、食われたりするのか？」

超常現象や不思議な事が気になるのだろう、晶は目を凝らしていた。

「ん？ なんだ？」

何かをとらえたのか晶は前のめりになり水面に顔を近づけ注視する。

「どうした？」

勇は問いかけながら晶が見る水面へ後ろから覗き込む、そのとき曲げた膝が晶の背にあたった。

「ちょ——」

水面を覗き込む状態だった晶に、その膝の一撃は体勢を崩すのに致命的な一撃であった。

「晶！」

咄嗟に勇は服を掴もうとするが掴めず、突然の出来事にそのまま晶はなすすべなく水面へ倒れるのだった。

ドボンと音と共に晶の視界は全て水に埋まる。

それは水面に顔を沈ませただけではなかった、頭頂部から足の先まで全てが水面下に沈んだのである。

「がぼ？」

ありえない光景に晶は水中にもかかわらず声を出す、音となら

ず泡となつて消えるだけだった。

晶の身体は全て水の中にあつたにも拘らず目を見開いていた、目の前に少女がいたのである。

脳が状況を理解できていないせいなのか、はたまた少女の姿に危機感を感じないせいなのか、不思議と晶はその少女をじつくりと観察できた。

少女は掌の指先から手首ぐらいの背丈で、妖精を髣髴とさせる可愛いものである。

羽は無く、肌は白いが髪、服、瞳が淡い青であり、真つ直ぐ延びた長い髪と、長袖の足首まで届くワンピースの裾を水とは関係なく、まるで空気中のごとくはためかせながら漂っていた。

晶は呆然としながらも首を回すと目の前以外にも少女は居た。

（なんだあれ！？）

沈んでいく青い少女を目で追い、下を見ると眼下には深海を思わせるほどの暗闇が広がっているが、よく見るとそこには同じ姿の黒色の少女が浮きも沈みもせず蹲っていた。

（ぐ……苦しくなってきた……で、出口は！？）

驚きで意識外だったが酸素が足りなくなった晶は流石に息が続かなくなり、危機を感じ身体をなんとか捻り出口を探す。

（光！？ てことは光源に水面があるはず）

真っ暗ではなく光が差し込んでいることから、晶は水面を予測し見上げると半円の水面が見え全力で泳ぐ。

（やばい！ 動き難い！）

しかしまとわり付く衣服と魔術の効果かやたらと粘性がある水で思うように進めないでいた。

（あと……少し……）

遅いながらも何とか手首から先は水面からでるが、予想以上に体力を要していたのだろう、限界に達し、ついには晶の視界が暗くなる。

「げふお！ げふお！」

「晶殿大丈夫か？」

ユナに背中を擦られながら晶は全身ずぶ濡れで咳き込んでいた。

ギリギリたどり着き水面から手を出したのが良かったのだろう、手を掴まれそのまま皆に助け出されたのである。

「なんでこの深さで沈むんだよ」

晶の無事を確認した勇が水面に近づき水を確認する。

見た目には体を倒しても全身入るには無理なぐらい浅い、不思議極まらないだろう。

「ゲホ！　それが、選定で弾かれた、結果だろう、ゲホ……」

両手をつき息を整えながら晶は推測する。

「ふゝ……ところでこいつらは何だ？」

呼吸が落ち着いた晶は立ち上がり肩に乗っている青い妖精の少女に視線を向ける。

水から出ていても見え、晶は思わず凝視してしまい、視線に気が付いたのか少女も振り返り目を合わせてきた。

子犬の様に円らな瞳で、若干見上げるような愛らしい姿に、晶はついつい指で小さな頭を撫でる、気持ちいいのか青い少女は目を細め大人しく撫でられているのだった。

「こいつらって……？」

メイが首を傾げる。

「いや、こいつ等だよ、この少女達」

晶は周囲を見回すと茶色の少女が地面を闊歩し、白い少女は光が射している場所を緩やかに飛行している。

青い少女は緑の少女と共に風に煽られ漂っていたり黒い少女の隣で座っていたり、赤い少女は日が射している場所で陽気に踊っていた。

メイと晶の間に白い少女が緩やかに飛行してきたので、晶は優しく襟を摘まむ、行き成り掴んで驚くかと心配したが借りてきた猫のように白い少女は大人しくしていた。

掌に乗せると女の子座りになり、そのままメイに見せるが晶の掌を見るメイははまだ首を傾げるだけだった。

「く！ 後遺症がのこったのか！？ この近くに医者はいないか！？ いや精神病院か！？」

「お、おい！ オレは大丈夫だって！」

いきなりの精神病患者扱いに晶は一步後退するが、勇に逃がさないと腕を確り掴まれる、晶は振りほどこうとするが元々体力に差があり無理であった。

「どこが大丈夫なんだよ！？ 少女なんて何処にも居ないぞ！」

「そんな馬鹿な！ ここに居るじゃないか！」

ありえないことだと驚愕する晶だったがメイ達の様子を見て、自身以外見えていないようだった。

「酸素不足から脳が少しやられた可能性がある……しかしみえる幻覚が少女とは……そこまで少女に飢——」

「飢えていると言っても言いたいのか、この野郎」

変態と決め付けようとする勇を睨む晶の眼光は鋭い。

「あの……医者？ 精神病院？ ですか？ よく分かりませんが、治療するなら私がしましょうか？」

「頼む！」

「いらん！」

マリアの申し出に勇は頭を下げるが、晶としては平常なので治療する必要が無いと考えているのだ。

「晶！ 大人しくしている！」

勇を振りほどこうと暴れる晶の足元に、茶色の少女が近寄り座り込む、突然のことに晶は何事かと思わず注視する。

「「おわ！」」

二人は晶に絡みついた物に驚き声を上げた、周囲の茶色い少女が小さな手で地面と軽く叩くと、地面から根っ子が伸び晶の身体を拘束したのだ。

「何だこれ！ う、動けん！」

「大丈夫……拘束する魔術……私がかけた……」

全身に力を込めて、脱出を図ろうとする晶にメイが説明する。

「そうなのか？　ありがとう助かるよ」

「……」

（ええーい！　こんな時に落としているな！　オレに余裕があるときにしろ！）

勇に大人しく頭を撫でられるメイはなんだか嬉しそうである。

「あの……　よろしいですか？」

勇が撫でているのが嫌なのか、マリアが若干不機嫌そうに勇に申し出ていた。

「存分にやってくれ」

「なにが存分にだ！」

親指を立て、歯が光りそうな笑顔で了承する勇に、威喝する晶だったが全く効果が無かった。

「分かりました」

勇に頼まれた事が嬉しいのだろう、笑顔で頷くマリアだったが、晶に振り向くがその瞳は酷く冷たい。

あまりにも冷ややかな視線と、身体を縛られた状態から抜け出せない事から晶は悟り大人しく治療を受けることにした。

「なんでそんな物を見るような目つきなんですか？」

「なんのことでしょうか？」

治す者の視線かと恐怖しながら敬語で話しかける晶だったが、マリアの返答は瞳同様に冷え切っており、そのまま晶の額に手を翳す。

詠唱なのだろうマリアがブツブツと何か囁く、逃げることを諦めた晶は大人しくすることにして、他に見るものがないため傍観していると又も不思議な光景を目にした。

白い少女がマリアの手に二人来ると両手を翳したのだ。

マリアの手と白い少女の手、そして晶の額の僅かな空間に白い光の玉が現れ、それは淡く輝き暫くの後消えるのであった。

（茶色い少女といい、白い少女といい、さっきからなんだ？ こいつら魔法と関係しているのか？）

晶は疑問に思いながら呆然と白い少女を目で追う、白い少女は先ほどの光が消えたあとジッとマリアの顔を見ていたが、反応が無いと分かったのか又どこかへ飛んでいった。

「これで大丈夫だと思います」

晶の時とはうって変わってマリアは嬉しそうに勇へ振り向く。

「どうだ？ まだ見えるか？」

「大丈夫だ、問題ない」

にこやかに答える晶だったが、その視界には相変わらず少女がうつっていた、しかし見えると言えば又面倒くさい事になりそうだと晶は判断し、直ったことにした。

「マリア、ありがとう」

「い、いえ！」

煌く勇の笑顔を向けられ、マリアは顔を真っ赤に染めるのであった。

「これってどうやって使うんだ？」

根っ子から開放された晶は動かして身体をほぐしていると、勇が宝玉を遊びながら首をかしげていた。

手の中には小さな白い宝玉があり、指に挟んで日にかざしてみたり、覗き込んだりしているがまったく変化は無い。

「念じれば装着できる、と書物には書いてあります」

マリアは白い表紙に一行ほど金の文字が書かれている本を開き、数ページめくり読み上げる、その様子を見ていた晶はふと疑問が沸き起こった。

「こういうのは伝承とか、口頭で伝わっていたりするのでは？」

「なんでもこの書物は初代の勇者様からご使用になられていたものらしく、宝玉の使い方などが書かれています」

書物から眼を離さないマリアの答えに晶は納得するが、持っている本を見ると新たな疑問が浮き上がった。

「初代勇者の事が書かれているか？ どれぐらい昔か分からないけどそれ程本が古くは無いよな？」

晶はじっくりと本を観察するが、その本は日焼けし変色している部分が無かった。

大事に保管してあったとしても多少は痛むものではあるが、その様子が殆ど無いのである。

「初代勇者様はおよそ二千年前の方です、勇様で五代目ですね、これは古くなる度に新しく清書しています、本は何もされていない普通の書物でしたから」

晶はなるほどと頷く。

「それにしても……結構アバウト……」

「だな」

メイの意見に晶は同意していた、念じろといわれても、どのように念じればいいのか分からないものである、しかし突然勇が鎧に覆われた。

「なにをしたんだ？」

平然と聞いているが突如姿が変わった勇に晶は内心驚いていた。

「装着ということからはとりあえず、特撮を想像して変身と念じてみた」

勇が自身の体を見回し、同じく晶も観察するとそこには真っ白な顔も覆う全身鎧とレイピアを装備した勇の姿があった。

竜の姿をモチーフにした装飾が施され所々棘のようなものが有り、兜は竜の顔を模していて口を開く形だった。

口の位置に勇の顔があり、その顔は目の以外を覆う簡素なマスクになっている。

「初めて見るが全身鎧だったのか……勇殿支障が無いか動かしてみたらどうだ？」

「そうだな」

ユナに言われたように勇は肩を廻し、足の関節も廻して筋を伸ばす、そしてどこかで見た動きを始める。

「ラジオ体操かよ！」

晶はおもわず勇の頭を叩いたが全身鎧の勇である、拳から伝わる痛さに蹲る晶なのであった。

「大丈夫か？」

晶の痛がり様に勇の声が申しわけそうになっていた。

「しかしこの鎧は凄いな、動きを阻害しないし物凄く軽いぞ、しっかりとレイピアも付属しているしな」

「流石勇者が使用していた鎧といったところだな、原理は分からないが装着する時に勇殿の体格に合う様になっているのだろう」

勇が腰に差してあったレイピアを抜き、改めて身体を動かしていた、その様子をユナの感心するように観察している。

「ところでマリア、解除はどうすればいい？」

レイピアを鞘に戻し勇はマリアに問う、一通り動かし何も違和感が無かったのだろう。

「はい、同じく念じれば戻るそうです」

マリアは本をペラペラとめくりながら答える。

「又アバウトな、初代勇者は本能で使用していたのか？」

「あはは……」

勇の意見にマリア自身も少し同じことを思ったのか、笑って誤魔化していた。

「じゃあ解除っ」と

鎧が勇から離れ、一瞬で宝玉へと戻っていった。

「うゝむ」

顎に手をあて悩み始めた勇に晶は声をかける。

「勇、どうした？」

晶が顔を覗き込とその瞳はとても真剣な目つきである。

何か問題があるのかと晶は気を引き締める、勇は何かを決意したのか勢いよく顔を上げ、おもむろに宝玉を握り締めた。

顔の横に両手の握り拳を持っていき、力を込め強く握ったあと素早く腕を動かす。

「変身！」

「どこのブラックの変身動作なんだよ！ さっき物凄く真剣な瞳はなんだったんだー！」

腹の底から鋭く叫び、勇の後頭部に晶はパゲンととび蹴り一閃ブチかましていた、先ほど手のツッコミはかなり痛くそこから学んだ結果である。

「鎧着たときの突っ込み酷過ぎるぞ！」

「無傷で済んでいるからこそだ！」

勇が後頭部をおさえながら詰め寄るが、晶は肩に手を置き清々しい笑顔で親指を立てていた。

「カッコいい……」

二人のやり取りの合間を縫うように感嘆の声が教会に響きわり、その音源へ二人が振り向くと目を輝かせるメイの姿があった。

「変身の動作……カッコいい……もう一回……！」

「えーと……今は思いつきでやっただけだから、改めてやると恥ずかしいのだが……」

ジッと熱い視線を合わせているメイに勇はたじろいでいた。

助けを求めるように勇はユナとマリアに顔を向けるが、そこには同じく期待の眼差しの二人が居た。

「……」

「……」

「……」

「わ、わかった」

メイは余程嬉しいのであろう、花が開く様に満面の笑みを浮かべていた。

根負けした勇は鎧を解除する、その顔は少し赤い、メイ達を一瞥

したあと小さくため息をつき、
恥ずかしさを吹き飛ばすためか勢よく構えるのであった。

脇役三

ぼさつと変身動作を見ている意味が無いと、晶は別のものに意識を向ける。

（さっきから見えているこの少女達はいつたい？ 妖精みたいなものか？）

晶が溺れてから見えるようになり、魔術を行使すると何処からか寄って来るのだ、魔術に関係しているぐらいしか分からなかった。

先ほどから漂っている少女を目で追う、緑や白の少女がマリアやユナ目の前を通るが、視線が一瞬も行く様子がまったく無い、ということは見えていないのだろう。

先ほど死に掛けた者が見えていない物を見えていると言い、それが少女だと言うのだ、精神に異常をきたしているとされるのも無理は無い。

改めて思い返す晶は自身の滑稽さに苦笑すると同時にふとある仮説が浮かんだ。

死にかけて見えなかったものが見えるようになる、それは幽霊が見えるようになると同じではないか、ということであった。

自分しか見えないのではとても少女達のことは周りに言えなかった。

「どうしたの……？」

小さな少女の事に関して考えにふけていた晶は声をかけられ思考を中断、声をした方に振り向くといつの間にか首をかしげているメイがいた。

「なんでもない、ところで勇は疲れるほど繰り返したのか？」

メイの後ろに肩で息をする勇が目に入った晶はちょうどいいと、追求を避けるため話を変える。

「おうよ！ 何度も頼むから一号、二号はもとよりV三からアマゾン、昭和ライダーのオンパレードやってやったぜ！」

晶に向かって親指を立てる勇の姿はやり遂げた感がすごかった。

「素晴らしかった……」

メイの表情の変化は無いが少し赤い、言葉の雰囲気から若干興奮気味のようにであった。

「この宝玉一つで魔王と戦えるのか？ 俺の戦闘技術とか経験が必要なのは分かっているが……」

勇が自身の鎧姿を見下ろしながら疑問を投げかける。

勇者が使用したと伝えられる物だけに、防御性能に問題ないだろ

うと晶は見当が付いていたが、外からでは身体能力が上がった様子は無く、立派な鎧と細剣としか感じられなかった。

「それだけではまだ駄目のようですね、今は封印状態なので世界の何処かにある鍵で解かないといけません」

マリアが本を片手に口答した。

「世界の何処か？ なにか情報等はないのか？」

勇と同じ事が聞きたかった晶も渋い顔つきになってしまっ、何もなしで探すとなると世界中くまなく探さなければいけない、世界は広いものである。

あてずっぱうに探すと途轍もなく手間がかかるのが目に見えた。

「え〜と……これかもしれません、先の錠、灼熱と砂の世界に眠りし石の蔵、影に籠りし空間にて眠るだろう、後の封、凍てつく吐息に晒されし山の恵み、深く沈み、青き世にて目覚めを待つ」

全員に聴こえるようにマリアは朗読する。

「先の錠と後の封、封印は二つか……」

「そして解く順番も決まっているみたいだな？」

ユナの言葉に勇が続け、なるほどばかりに晶も頷いていた。

わざわざ先と後と付くのだ、順番が決まっていると考えていいだろう。

「先に行く場所は灼熱と砂から砂漠の可能性が高そうだな。凍てつく吐息は吹雪か？ 北の寒い地域位しかわからないな……」

漠然としかが分からないためだろう、勇は少し不安げな声を上げる。

「砂漠はオキ砂漠がある……寒い地域は範囲が広すぎる……」

「じゃあ……始めはオキ砂漠か？ 他の細かいことは其処の近くにある村や街の伝説とか、言い伝えとか聞いて推測するしかないな、勇者に関係することだから何かあるだろう」

メイの情報から目標をきめた勇の意見に全員頷く。

「その前に、勇が何処まで通用するか試したらどうだ？」

行き成り都から出て戦闘するのはどうかと、晶が手を小さく上げて口を挟んだ。

「そうだな、勇殿一つ手合わせ願おう！」

やはり騎士というだけあって戦闘に興味があるのだろう、ユナが嬉々として願い出た。

「おう！ 良いぜ！」

勇も楽しみなのだろう景気良く答えていた。

大きな広場には所々に木で出来た案山子のような人形が立っている。

晶が周囲の壁に目を配ると多種多様な武器が置かれているが、不必要に怪我を増やさないためか一部を除いて木材で作られていた。

そこは修練場と呼ばれている場所である、流石に神殿で模擬戦を行う訳にもいかないと此処へ移動したのだ。

「実はユナ、お前に興味があつたんだ」

勇はフェンシングをやっているだけに、強いも者との勝負には興味があるのだろう、しかし目を細めながら言った台詞は晶が聞いても告白じみたものであった。

「な！ なにをいきなり！」

勘違いしたのか、途端にユナは顔を赤く染め上げ仰け反っていた。

自身が言つた言葉がどのように相手に聞こえたか、勇の態度で分かっている事が晶には一目瞭然であった。

「なにをいきなりって、なにが？」

「……………」

首を傾げる勇の姿から同じく理解したらしいユナは、顔を赤らめ

たまま目を逸らして押し黙る。

「わたしは神官ですけど戦えますよ」

いまだ頭を捻っている勇のそばにマリアが近づき軽く袖を引つ張っていた、マリアの期待が込められた眼差しから、ユナに言った言葉と同じく言ってほしいのが明白である。

「ほほう、そいつは楽しみだな」

「あの、そうではなく……きよ、興味が……その……」

マリアがなんとか言葉を引き出そうと四苦八苦していたが、効果がなかったため肩を落としていた。

そんなのじゃ勇には分かってもらえないと晶は首を振る。

「では……始めるか」

咳を一つして気を持ち直したユナは壁に掛けられた木刀を持ちだし、そして同じくかけられていた金属でできた練習用レイピア——練習用のため先端が丸められている——を勇へと放り投げた。

「おう！」

ユナが正眼に構えると勇も受け取ったレイピアをフェンシングの独特の体勢になる、鎧を着けないのは純粹な戦闘技術が何処まで通用するかを図るためだと晶は推測した。

そいえばと晶は先ほどのマリアの行動を思い出し、楽しめそうだ

と密かに笑みを浮かべる、そして回りに気付かれないようにマリアへそつと近づく。

「マリアさん」

「ひゃ！」

落ち込んでいる時に突然声がかかった感じだったのだろう、晶が声をかけるとマリアが驚きの声を上げた。

「いつ来たのですか！？ 驚かさないでください！」

「話しかける人に大概言われるよ」

どんな相手でも晶が普通に話しかけると大概驚かれていたのだ、しかし例外はあるもので勇と両親は慣れたのか驚かれる事は余り無い。

「少しいいか？」

「駄目です」

凍えるような瞳を向け容赦なく断るマリアだったが、晶は引かなかった。

「勇に関する事——」

「なんですか？ 早く迅速に即効で話さない」

勇のことを出した途端に、掌を返すマリアに晶は内心釣れたとほ

くそ笑み、声を小さくして話す。

「勇に誤解されたくないだろう、だから少し離れよう」

晶は声を潜め、そしてそのまま勇に気づかれないようにマリアと離れていった。

勇に気づかれて晶とマリアがお互いに気があると誤解をさせないためである。

「マリアさんは神官で、回復といった魔術関係が使えたよな？」

「はい、使えますが？」

マリアも同じく声を潜め、自然と周りに聞かれないように二人してしゃがみ込み、ヒソヒソと話す。

「なら勇が怪我したときが好感度を上げる時だ」

ジッと晶に視線をおくるマリアは一言一句聞き逃すまいと真剣である。

「実力差がどれ位有るか分ないが、多分二人が手合わせすると白熱して無傷ではいられないはず、そこで勇の傷を優しく癒せ！」

「貴方に言われなくても行います」

侮辱されたと勘違いしたのかマリアの眉間にシワがより、厳しい視線を晶にぶつけてくる。

「たしかにそうだろう、しかしただ治すだけで勇の場合効果は薄い、そこで癒した後ニコリと微笑を浮かべる、それだけで大分違ってくるさ！」

しばしの沈黙のあとマリアは一つ頷くと勇達二人の近くで待機し、その様子を見ていた晶は上手くいきそうだとほくそえむ。

実は前の世界で勇を取り巻く女性達のゴタゴタをこっちの世界でもやろうと画策しているのだ。

元の世界では勇の周りに色んな女性がいた。

ウェーブがかった赤い髪に青い瞳の整った顔立ちのうえ優しさと武力の高さもある、まさに女性からすれば理想の一つだろう、当然勇に関わった女性たちは皆勇に惚れていった。

それに伴い周囲の男性は嫉妬に駆られるのも当然の結果であり、最初は晶もその一人であった、だが勇にいじめを助けてもらってからというもの、行動を共にすることが多くなっていった。

あまりに多くの女性に言い寄られる勇に、晶は嫉妬をするのが馬鹿らしくなったのである。

晶が馬鹿らしくなっても女性が増える一方であり、それを見ていた晶はあることに気が付いたのだ。

嫉妬せずに見ていて意外と楽しいのである、それはまるでハーレム物の小説を見ている感覚だったのだ。

それから晶はもっと楽しもうと影の薄さを利用し、裏から色々画

策するようになったのである。

ゆっくりと二人の間合いが詰められていく。

「せい！」

気合と共に勇は仕掛ける、狙うは鳩尾、一直線に突き出していた。

「は！」

しかしユナが木刀で左へ受け流し、そのままレイピアを伝い滑らせるように首へなぎ払ってくる、とっさに勇は後退し回避、大きく下がり間合いが開いた。

「やっぱり、これ位じゃ駄目だな」

「ふふ、当然だな」

まだまだ練習程度なのだ、お互いの楽しげに笑うがその周囲の空気が張り詰め、重くなっていく。

先ほどよりも遅くじつくりと間合いを詰める。互いに機会をうかがい、次の瞬間ユナが一気に詰め寄った、振るわれた刃は様々に変化している。

「せい！ やあ！」

フェイントを交え、上段、中段、下段と素早く的確に打ち込んでくるが、勇はまだまだ捌けていた。

「なんの！」

勇も負けずそれらを素早く回避、受け流す。

僅かな隙を見つけて鳩尾や喉など急所を狙っていくが、ことごとく弾かれていた。

「はあああああ！」

「おおおおお！」

二人の裂帛の気合と共に速度があがる、蝶のように舞い蜂のように刺す、互いの攻防が目まぐるしく変化していく姿は正に演舞であった。

「いくぞ！」

拮抗状態から脱するためかユナが一気に攻め始め、素早く繰り出し勇の反撃を封じる。

あまりの猛攻に全て防ぎきれなくなり勇の体に所々掠り始めた、好機と思ったのだらうユナは回転数をさらに上げる。

急所は回避している勇の体力に限界がきた、ついには踏ん張りが利かなくなりバランスを崩す。

「もらった！」

「まだだ！」

ユナは一気に振り下ろす、しかし強引に体勢を崩したままやぶれかぶれで勇が振り払ったレイピアがぶつかり、激しい衝突音と共に二人は弾かれるように離れた。

「はあ、はあ、流石勇殿」

「ぜえ、そ、そっこそ」

息を切らせ二人の顔が愉悦に歪む。

「ふー、これで最後だ」

ユナは正眼に構え直しながら呼吸を整え始めると、気迫が増しているのが勇には肌で感じ、何が来ても対処できるよう気合を入れ迎え撃つ態勢をとった。

「はあ！」

大きく一歩踏み出し大上段から振り下ろすと同時に、切っ先から青白い衝撃波が地面を抉りながら勇に襲い掛かる。

勇は驚いたが一瞬で気を持ち直し、レイピアを横に構え衝撃に備えるが衝突し空気が爆ぜるとともに勢いよく勇が吹き飛んだ。

「うぐ、な、なんだ今の？」

身体が痛むが、勇はなんとか上体を起こす。

「熟練の戦士なら、誰でも使える、まだやるか？」

リスクがあるのだろう、切っ先を向けるユナは息が荒い。

「無理！ 俺の負けだ！」

体力の限界と身体の痛みで立てそうに無い勇は負けを宣言して、力を抜きぐったりと仰向けに倒れるのだった。

「大丈夫ですか？」

マリアが勇に素早く寄り添い優しく触れる。

「光よ、浄化の力をもって癒したまえ——ヒーリング——」

マリアがそつと触れる手先から白く淡い光が見て取れ、傷が治りそれと共に勇の息も整っていく。

「へえ、傷だけじゃなく体力も回復するのか、マリア、ありがとう」
「気にしないでください」

勇は自身の体を見回して礼を述べる、傷が治ったのを確認したマリアは安心したような柔らかい笑顔を浮かべ、それを直視したのだ

ろう見ほれているような勇なのであった。

その様子を晶は凝視していた、マリアと勇を見て楽しんでいたい
が、別に気になるものが見えたのだ。

魔術を行使したとき飛行していた白い少女が近寄ったのだ。

（白い少女が魔術を手伝った？ いやむしろ少女達が行使するほう
？）

客観的に見れたせいか晶がかけられた時よりも詳しく観察できて
いた。

先ほどマリアの手先が光っていたとき白い少女が三人集まり傷へ
手を翳し、手から発せられる光を当てていたのである。

光が当たる場所の傷は治療されていき、小さな足を懸命に動かし
て勇の周りを走り、傷を次々に治していったのだ。

ユナにヒーリングを施しているのを見るがやはり同じである。晶
から見るとマリアが治すというよりも、少女達が治しているようであ
った。

「そういえばメイさんは魔術師だよな？」

ふと魔術関係ということで思い立った晶は、メイに問いかけると
メイは頷きで答えた。

「すまんが、魔術を見せてくれないか？ 実際に見ておけば、使わ
れても動揺しなくなると思うのだが？」

「そうだな、一度見ておきたいな」

勇が同意していたが晶の目的は言葉通りではない、色の少女達が魔術と関係しているか確認したためである。

「分かった……」

メイは了承し案山子の人形に正対すると、持っている杖を軽く掲げる。

「火よ、燃え盛る炎をもって焼き尽くせ」——ファイヤーボール——

杖の先端から人の頭ぐらいの火球が現れ打ち出される、かなりの高速で飛び、人形に当たると爆発を起こし煙に包まれた。

風に吹かれ煙が晴れるとそこには頭部消失し、炎上する胴体を残す案山子があるだけだった。

「すげー！」

勇が興奮した様子で叫ぶ、その瞳が好奇心で輝いているのが分かる、褒められたメイは自慢げにちよつと胸を張っていた。

やはり少女達は魔術に関係してそうだなと晶は神妙な顔つきで結論をだしていた。

詠唱——火よ、燃え盛る——の部分——すると二人の赤い少女がメイに近づき、頷くと杖の先端へ移動、唱えると同時に小さな紅葉の手を翳したのだ。

火球が現れ、そして少女二人は喜色満面の笑顔で転がし始めたのである。

火球が爆発した時は爆風に巻き込まれ吹き飛んでいたようだったが、これまた楽しそうであった。

攻撃の魔術を小さな少女が興じる、なんともシュールな光景である。

その後メイの近くに行きジッと見ていたが何処かへ行くのであった。

怪しまれないよう晶は全員から少し離れてしゃがみ込む、近くにいた青い少女に視線を向けると晶へ振り替えた。

ためしに小さくおいでと呼ぶと青い少女は晶に近づき見上げる。

（呼ぶと近づくな……青いから水関係？ 水が出せたりするのか？）

突如青い少女が両手を突き出したかとおもうとその手から、如雨露のように結構な量の水が出た。

（声に出した？ いやそんな覚えは……思考を読んだ？）

出し終えたのか青い少女が晶をじっと見詰める。

（そういえば頭を撫でると嬉しそうだったな）

選定の時に肩に乗っていた少女を晶は思い出し、青い少女にそっ

と手を伸ばす。

怖がるかと思ったがそのような様子もなく、そのまま頭を撫でると青い少女は目を閉じ気持ちよさそうであった。

「ありがとう」

晶が小声で礼を言い、手を離すと少女は嬉しそうにお辞儀をしてどこかへと歩いていく、見送った晶は次々に各色の少女を呼び、手から出してもらった。

（ふむ、赤い子は火、青い子は水、緑の子は風、茶色の子は土、白い子が光で残りの黒い子は多分闇といったところか？ 使ってもらってもオレが疲れないのはいいな）

両手の先から赤い子は火種を、青い子は如雨露のように水を、緑の子はそよ風を、茶色の子は拳大の石を、黒い子は黒い霧を、白い子は光を発生させていた。

戦闘に使えるか思ったが赤い子と茶色の子はある程度しか変えられず他の子は両手から形も決めることすら無理であった。

共通してただ出すだけなので、戦闘にはまったく使える様子は無かったのである、ちなみに黒い子の霧を晶は触ってみたが何も感じず、思い切って顔を突っ込むと真っ暗なだけであった。

（二人以上は無理か、さてオレのことはこれぐらいかな？）

勇に視線を向けると杖をもって唸っているが、どうやら魔法の使用を試しているみたいだった、しかし残念なことに少女が集まる様

子が無く、全く発動できる兆候すらなかった。

脇役四

「ついでだ、魔技術まぎじゅつも説明しておこう」

勇の唸っている姿を見ながら思案顔のユナが提案した。

「魔技術？ さっき俺が吹き飛ばされたやつか？」

「そうだ、本来は鍛錬を繰り返し、自分の中にある魔力を感じ操るのだが……」

安全のためかユナが答えながら、晶達から少し離れた位置で説明する。

「あの……御免、魔力を感じるってどうやるんだ？」

申し訳なさに手を挙げる晶に、全員の視線が何をしていたと鋭く突き刺さる。

「さっき……説明した……」

「すみません、聞いてなかったです」

少女達の実験をしている時に説明されていたのだらう、晶は素直に頭を下げる。

「だったら知らなくて良いのでは？」

マリアの侮蔑の視線が痛い晶は申し訳なさで縮こまるばかりであ

る。

「そう言うなって、晶にも教えてやってくれないか？」

「わかりました！」

勇の一声で明るく返答するマリアだったが、晶に振り返った時には打って変わって、あきらかに面倒くさいと言いたげな顔であった。

「ハア……これはグロウアの腕輪です」

ため息をしながらマリアが渋々といった感じで手を出す。

掌の上には金色で装飾が一切無い簡素な腕輪があった。

「それは術者見習いが着けるもので最初の段階、魔力を認識するための物です。魔力とは……簡単に言くと空気中や体内にある、不思議な力が込められた小さな粒と思って結構です、では着けて下さい」

魔力を操る才能が有ったとしても見えないものを認識するのは難しいもので、主に視界を中心に補助し認識するための道具がグロウアの腕輪であった。

「空気中や人などから発せられる魔力を見ることが出来ますが、わたしやメイの周りに何か見えますか？ ユナは少し違って見えると思います」

マリアに言われて腕輪を付け、目を凝らすと晶には何も見えない、続いてユナにも目を移すがやはり何も見えず、相変わらず小さな少女達が漂っていたり、座っていたり散歩していたりしているだけで

ある。

「何も見えませんね」

「そうのですか？　だとしたら才能がまったくありませんね」

「ぐふ！」

挟り込むような容赦の無いマリアの言葉に、晶は胸を押さえ地面に両手をついた。

「少しでもあれば……神官や魔術師などの周囲に、撒き散らす霧のように……騎士や戦士などは立ちのぼる陽炎のように……薄っすらと見える」

落ち込んでいる晶に視線を合わせるためだろう、メイはしゃがみ込んで補足する。

「たぶん……オレ達のいた世界には魔術は無かったから……そのせいだとおもう」

礼を述べながらよろよろと晶は立ち上がり予想を立てる、それが一番の納得できる理由でもあった。

「勇者様はありましたけどね」

「どれだけ優秀なんだアイツ」

勇の才能にうつとりとするマリアだったが、反対に晶は異世界に来てまで新たな才能が発見される勇の完璧ぶりに呆れるほか無い。

「では技の続きを説明するぞ」

説明が終わり魔技術の講義をユナが再開する。

「まず内にある魔力を感じ、それを体の何処か、又は武器に送り込み」

木刀をゆっくり上段へもっていき、頭上で停止すると青白く光始める。

「刃についた水滴を飛ばすように……放つ！」

一気に振り下ろすと、切っ先から青白い衝撃波が撃ちだされるのを晶は見た。

しかし先ほどの模擬戦と比べ大分小さいものだった。

「今のは分かりやすくゆっくりとやったが、実戦では素早く使用できないと話にならないからな」

一息つき構えを解くユナは先ほど勇に放ったときとは違い、それほど疲労が無いようだった。

「横に難いだり、突いたりとか他にないのか？」

勇が疑問を口にする、同じ事を晶も考えていた。

上段のみだとすれば動きを見ていれば比較的避け易いだろう、もちろんフェイントをなど分かりにくくしたり、かなり速度で振った

りなど創意工夫されているのが当たり前だろう。

「いや、突きや横薙ぎもある。他にも身体纏わせて一時的に身体能力を上げることもある。聞いた話だと全身に魔力を回し気配を消すことも可能だそうだ」

ユナの説明になるほどばかりに二人が納得しながら頷く。

「魔力を感じ」

早速実行し始めたのか勇は目を閉じ、レイピアを持つ左手、左半身を前に出した構えを取る。

「送り」

レイピアを前方に向け胸元に持っていく、するとゆっくりとだが刀身が光りだした。

「打ち出す！」

瞳を開くと同時に突き出す、その瞬間、先端から弾丸のように、細く鋭い青白い衝撃波が撃ちだされた。

ガッツポーズをとる勇は結構嬉しそうであったが少し息が荒くなっている。

「しかし意外と疲れるもんだな？」

感想を述べる勇に晶は呆れ顔であった、魔力を知ったばかりなのに使用したのである、フェンシングをやり込んでいるとはいえ直ぐ

さま実行出来ることに驚きを通り越し呆れるほか無い、この世界でも驚異的なだろうメイとユナは呆氣にとられ、マリアは目を輝かせていた。

「あ、ああ、手加減無しで放ったからだ」

正気を取り戻したユナは説明を続ける。

「魔技術はこれ以外にも色々とあるが一つ扱えるまでが苦勞する。だから基本一人一つなのが多いな」

「魔力を感じることは出来るなら、魔術と技は同時に使えないのか？」

レイピアを手で遊ばせながら勇は疑問を口にする。

「はい、体内の魔力を感じるのは同じですが、それをどう操るかはまったく違うのです。頭で理解し法則を覚える、それらを書物などから学んでいく方法が魔術、魔力を込められるまで一つの動作を体になじむまで行いというのが魔技術です」

マリアが熱のこもった声で答えながら、潤んだ瞳の視線が実行した勇に注がれている。

「魔術が理論などの学術的なものに対し、魔技術は体に覚えさせる武術的なものといったところか？」

「そう……そして魔術は詠唱する分発動が遅い……けど遠くまで届く……魔技術は直接発動するから……素早く打ち出せる……でも射程が短い……」

「一長一短がしっかりとあるんだな」

メイの補足を聞き、世の中上手く出来ているよなと晶は頷きながら感心するのだった。

「そうだな、だから魔術師が一方的だったりはしないし、逆に騎士達が優位と言うわけではない、お互いに協力し合うことが大事だな」

ユナが指を立て晶の意見に同意するように頷いていた。

「フ……根本的な魔力が認識できない自分は役立たず……足手まといは避けたいな……」

気落ちする晶は気持ちを和ませるため、足元を通りかかった茶色い少女をなでくりまわすのだった。

「勇者様と晶さんはこちらをお使ください」

元々一泊させるつもりだったのだろう出発は明日となった。

晶と勇が通された部屋は豪華な作りになっており、金、銀、そして宝石が散りばめられているが派手さは無く、意匠は必要最低限に留められている。

椅子やベッドは上質な物を使用しているのが晶は感触で分かった。

「私は隣の部屋にいますので、何かご入用でしたら遠慮なく言ってください」

失礼しますと笑顔を勇にだけ向けてマリアは退出した。

「やっと落ち着けたような気がするな」

勇がベッドに横になりながら言う、その意見に同意しながら晶は椅子に腰掛一息ついていた。

「まあ、召喚されてから謁見、選定、そして模擬戦と立て続けだったからな」

感じている以上に疲労が大きかったらしく、ため息と共に漏らす晶だった。

「本当に現実なんだよな」

夢物語のような現象だからだろう、ベッドで横になっている勇は天井へ手を伸ばし、握ったり開いたりして夢ではない事を確認しているようだった。

「かなり非現実的だけど、痛みはもとより五感がしつかりあるからな」

晶も椅子に座り、自身の掌を見ながら同意する。

「実は感覚もある夢で、一旦寝たら何事も無く元の世界に戻ってい

たりしてな」

笑う勇だったが本当はこれが現実だと認めているのを、晶は言葉から感じ取っていた。

「というか俺たち普通に戻れるって思っているが、本当に戻れるのか？」

「確かにそうだな……念のため聞いてくる」

マリアにその辺りを聞こうと椅子から立ち上がり、晶は部屋から出ていった。

「たしか隣の部屋だったな」

晶達を通された部屋は角にであった、そのため隣は一つしかなく其処へ向かい扉を軽く叩く。

「マリアさん、少しいいか？」

暫く待つが全く返事が無い、首をかしげる晶は再度強めに叩く、しかしそれでも何も反応が無かった。

「マリアさん？」

失礼と思いつつも晶はドアノブに手をかけると何の抵抗も無くすんなりと扉が開く、鍵は掛かっていなかったのだ。

晶はそつと覗き込むとその部屋は明かり一つ灯っておらず、暗闇に閉ざされていたため訝しげに思いながらも目を凝らす。

「……」

廊下から光が差し越す部屋を照らし出し、晶は見に入ってきた状況に何とも言えず沈黙するほか無かった。

真っ暗な部屋の中マリアは居たがその姿が異様なのである。

ベッドに正座し、壁に向かい微動すらせず凝視していたのだ、しかも向いている方向は先ほど晶が居た部屋である。

晶はいままで自身に向けられた暗い瞳を思い出し、寒気に身を振るわせる。

「見なかったことにしよう」

触らぬ神に祟り無しと静かに扉を閉め、晶は部屋に戻った。

「どうだった？」

「あー、今は居ないみたいだった」

晶は室内を見たことを無かったことするため、ドアを叩いたが反応が無かったと説明する。

「そうなのか？ 隣にいるって言っていたよな？」

口にしながら勇はさつさと部屋を出て行き、その後ろを晶はついて行く、晶は今までマリアの態度から勇が相手なら出てくるのでは？ と後ろを歩きながら少し期待をしていた。

「マリア、居るか？」

マリアがいる部屋の扉を勇は叩く。

「ハイ、どうしました？」

扉に張り付いていたと晶が勘ぐるほどに顔を出すマリアの対応は早かった、振り返る勇は居るじゃないかと言いたげだったが晶は当然無視する、正直なところ勇だから出てきたと言いたかったのだ。

「少し聞きたいんだけど、俺達って元の世界に戻るよな？」

「え！？」

勇の質問がかなり衝撃を受けたようで、マリアの顔から一気に血の気が引いていく。

「この世界を……わ、私を……捨てるの……ですか？」

「うお！　ちょ、ちょっと待て！　泣かないでくれ」

身体を震わして涙目になるマリアに勇はあわてる。

「安心しろって！　ちゃんと魔王を倒すから、な！」

勇はなんとか慰めて聞き出している様子を晶は見ながら疑問が浮かぶ。

（マリアさんの態度は何だかやばいな……こっ……病んでいるよう

な……だとしたら勇の修羅場で出血ぎた！？)

晶から見ても物凄く言いたくないといった感じであり、戻れると口にだした時も俯いた状態でボソボソと辛うじて聞こえるような声であった。

勇の後ろから見ていたので俯いた時、あの暗い瞳になっていたのが晶には見えたのである。

「なるほど、色々と手順が必要なうえ魔力も大量にいるのか……おいそれと使う訳にはいかないのか……ありがとうな」

「……」

マリアが俯きながらからかうじて頷き、勇が扉を閉めるまで顔を上げることは無かった。

「なあ勇、マリアさんはどうしてあんな病んでいるんだろうな？」

マリアに聞かれたくないため、泊まる部屋の前で話しかける。

「病んでる？ なんの事だ？」

お互いに言っていることが一瞬理解できず黙り込んだ。

「あのな勇、マリアさんの態度、分かっているよな？」

訝しむ晶は確認をとってみるが相変わらず勇は首を傾げるだけである。

「本当に分からないのか？ お前が勇者をやると決めた時のマリアさんだぞ！」

「決めた時……わからんな」

この時晶は勇の様子が変だと気付き、よく観察すると目の焦点が合っておらず、虚空を見つめヘラヘラと笑っている。

「勇！ 目を覚ませ！」

晶は襟元を掴み全力で揺さぶる、それがこうをそうしたのか勇の瞳に生氣が戻ってきた。

「あれ？ 何の話ししていたっけ？」

「余程怖かったんだな……何でもない、何でもないんだ……」

肩を叩き慰める晶はホロリと涙を拭うのだった。

部屋に戻った二人は明日から大変だろうと、早々に寝ることにしたが、新たな問題が発生していた。

「どうする？」

勇が悩みながらあるものを見ていた、同じく晶も注視する、そこには部屋の中にあるたった一つのベッドである。

元々一人しか召喚されないはずであったからだろう、ゆえに部屋は一人用である。

勇者が就寝する部屋なのでかなり上質で広いが、家具は一つしかなく二人が泊まれるようにはできていない。

「同衾なんぞ考えただけでもおぞましいな」

「やめてくれよ……」

それなりに大きなベッドであつたが、掛け布団及び枕は勿論一つである。

晶は勇と一緒に寝ている姿を想像し、あまりの光景に身を振るわせた、その姿はまさに同性愛者そのものであり、同じ想像したのか勇も顔を顰める。

「とにかく！ 一人はそっちに寝ることになるな！」

想像を吹き飛ばすためだろう、気合と共に荒げる勇が指差す物を晶が見ると、そこには2人掛けの椅子があつた。

椅子としては大きめだが、元から寝るためのものではない、寝返りを打つとあっさり椅子から落ちたりとかなり寝苦しいことが想像できる。

そのとき晶に電撃が走るかのごとく名案が浮かび上がった。

勇を気絶させて自分がベッドを占領すれば、心地よい眠りが約束されるのでは？ 真正面からやれば当然負けるが不意を突けば勝つこともあるかもしれない、晶はそう考えた。

勇に気付かれる前に迅速に行動するため、殴れる手近なもの求め、

素早く室内に視線を回した瞬間、とんでもない物が視界に入る。

「勇……おまえ……」

そこには宝玉を開放した完全武装の勇がいた。

「なに、気絶するのも寝るのも同じようなものさ」

「貴様！」

「お前だって同じ事考えただろう！」

ドタバタと音が鳴っていたが暫く後には静かになり、部屋の明かりが消えるのであった。

王都トキは小高い丘の上に作られた街である。

丘の頂点に王城を建設、その周囲に貴族達の豪邸が立ち並び、さらに周辺には一般市民の住宅が立ち並んでいる。

丘に沿って都市が形成されており、そのため平地が殆ど無い、大きな通りは緩やかな坂になっているが、道は基本的に階段が張り巡らされていた。

「これまた複雑に入り組んでいるな」

王城を出て貴族が住む高級住宅街を抜けた晶は、面倒くさいと後

ろを振り返った。

豪邸が立ち並ぶ地区は多少大きめに道が整備されているが、それでも何度も折れ曲がり複数の道が交わる交差路を通ってきたのである。

迷わないよう先行していたユナとメイの後ろを歩き、やっと一般住宅街へ入り一息ついたところである。

ちなみに晶達の服装は詰襟の学生服ではない、流石にあの詰襟学生服は目立ちすぎるのだ、二人が目を覚ました時に MARIA が服を持ってきたのである。

晶には厚手の生地を使用した質素で地味であり、頑丈さを求めたこの世界の一般人が着る茶色っぽい服であったが、勇はかなり良い素材ゆえだろう、薄手ながらも丈夫さと動きやすさを兼ね備え、小さな装飾が僅かに入っている白を基本にした一点ものと思わせる高級な衣服であった。

普通なら服装の差に不快感を示すものだが、目立ちたくない晶には地味である方が都合が良かったため特に不満は無い。

「此処まで降りてくるまで MARIA 達の案内が無かったら、盛大に迷っていたらどうな」

同じく後ろを振り返りながら歩く勇と同意見の晶は道順をなんとか思い出していたが、細かい所が思い浮かばず途中であきらめた。

慣れれば迷わないかもしれないが、まだ来たばかりの場所なうえにこれといった目印も無いのだ、一発で覚えるのは無理な話だろう。

「攻め込まれた時はこの複雑な路地が敵の進行を遅らせるからな、これも防衛のためだ」

晶が前へと視線を案内のためにユナが先頭を歩きながら説明する姿は、親が子供言い聞かせるような口ぶりだった、二人が年相応の子供っぱさを見た所為か優しい視線で微笑んでいた。

「勇者様、危ないですよ」

最後尾にいたマリアが注意を促す、その声が聞こえた瞬間に小さく悲鳴があがった。

晶が見ると其処にはバランスを崩した女性の姿であった、余所見をしていた勇が女性とぶつかったのだろう。

女性が抱きかかえていた雑貨が散らばり階段を転がり落ち、晶の足元にも転がったのでとっさに足で止めたあと拾い上げる。

晶は女性は大丈夫かと一瞥すると勇が手を伸ばし抱きとめていたため女性は無傷のようだった。

「すまん、大丈夫か？」

よそ見をして女性を危険に晒したのだ、勇の声は申し訳ない気持ちで一杯であった。

「あらあら、ありがとうございます」

雑貨を拾い集めながら晶は階段を上り勇達を見ると、抱きかかえ

られた女性は現状を時間が掛かったのか少し呆然としたあとやや遅れて礼を述べ、頬に手をあて柔らかな笑みを浮かべていた。

その人はマリア達に負けず劣らず美人であった。

二十代後半ぐらいで大人びており、深緑は真っ直ぐに足元まで伸ばされている、髪と同じ色の瞳で柔らかな笑みを浮かべている姿は、あらあらうふふ、と全て済ましそうであった。

一般市民なのだろう、厚めの茶色を基調とした生地ワンピースに腰辺りに細い簡素なベルトをしている。

煌びやかさよりも丈夫さに重点を置いた質素な服装を着ているが、服に包まれた体はとても魅力的であった、女性達三人が自身の体と見比べて悔しげになるほどである。

「ところで……勇者様」

マリアが勇に近づき声をかけるがその声は酷く暗い。

「ど、どうした？」

睨まれているのだろう、勇が緊張しているのが晶にはとてもよく分かった。

「いつまで抱きしめているのです？」

言葉が脳に達したのか勇は抱えている状況に気が付き素早く離れ、恥ずかしげに頭を掻きながらすまんと一言あやまるが女性は気にしていないのか相変わらず微笑んでいるだけである。

「すみません、無事なものがこれぐらいしか残らなかった」

運悪く落ちたものが殆ど丸い果物や根野菜といったものだったので、晶達は雑貨を少量しか拾えないでいた。

不運なことに長々と続く階段を転がり落ち、無事だったものは急いで止めたものや細長い物しかなかったのである。

「まあ、困ったわね？」

本当に困っているのだろうかと思つた晶が疑問に思つるほどに、女性はかわらず微笑みを浮かべているのだった。

「なら俺達と一緒に買い集めるか？ もちろん費用は俺達が出す」

「私達に非があるからな、当然だろう」

勇の意見にユナは同意し、晶も特に反対する理由も無かった。

「こつちも余所見していたし、申し訳ないわよ」

「気にするなつて、お詫びだから」

自然に行うのかはたまた狙っているのか、遠慮する女性に笑顔を振りまきながら勇は手を差し伸べる。

「ふふ、じゃあお願いしようかしら」

女性はにこやかに笑いながら優しく手を重ねた。

「お嬢様、お名前を窺ってよろしいかな？」

「あら？ 名前を聞くときは先に名乗るのが礼儀じゃないかしら」

「これは失礼、私は日乃下勇です、勇とおよび下さい、以後お見知りおきを」

「私はマーガレット、マーガレット・デイ・シーです、よろしく」

「こちらこそよろしく」

二人は互いに紳士淑女な芝居がかったやり取りをするが、演じる人物は美男美女である、行っ様子は非常にきまっていた。

「そつえばどれ位資金があるんだ？」

「そうだな……国庫並みか？」

金額を思い出しているのかユナが顎に手を当てて首をかしげ、途轍もない返答に一瞬何を言われたのか晶と勇は視線をあわせる。

「国王が……要求すれば……いくらでも出す……」

「「本当に!？」」

メイのとんでもない答えに晶と勇は目を見開く。

「はい、本当です。現在所持している金額で足りなければ此方で用意すると王様が言われました。このように渡された金額も多いです」

マリアは小さな袋を懷から取り出していた。

見た目は小さいが入っている金額は、かなりのものであると晶は想像するほか無かった。

「現状は思ったよりも切羽詰っているみたいだな」

「ああ、ゲームとかだと、大概国王からもらったものと言えば非金屬製の武器と防具、それと安い傷薬数個買ったらスツカラカンな資金だけだからな」

向かい合って現状を再度認識する二人であった。

都市に入る城門の前に広がる大きな通りは非常に賑やかで、左右に足り並ぶ露店から威勢のいい呼び声が響き、小さな子供が元気に走り回り、親子が仲良く散歩している活氣溢れた場所である。

「へー、違う町から来ていたのか」

「ええ、ちょっとした用事でこの王都にきたのよ。もう終わったけどね、後は帰る準備しているところだったんだけど……」

「その時にぶつかったのか」

勇とマーガレットは和氣藹々と話をしながら品物を物色している

姿は、晶から見てもなかなか良い雰囲気である。

「勇者様！ 無駄話はしないでさっさと終わらせましょう！」

「おっと、引つ張るなっつて」

不機嫌なマリアが強引に勇の腕を抱えて引つ張り、マーガレットから引き離していく、強く引かれて体勢を崩した勇は躓きながらも後ろを着いて行くが困惑しており、マリアの機嫌が悪くなった原因は分かっているのだらう。

「マーガレットさん、勇のこと気に入りました？」

「ふふ、そうね、彼カッコイイし優しいわ、嫌いではないわよ」

仲良く買い物していたマーガレットが勇に気があるのか晶は探りをいれる。

惚れたのなら勇のハーレムに入れて楽しもうと画策していたのだが、残念ながらマーガレットの表情が笑顔だけなので判断が難しい。

「私に興味があるのかしら？」

「まったく無いとはいいませんよ」

今後の勇との関係がね、晶は心の中で付け加える。

「さて、マリアさんが引つ張っていききましたが、マーガレットさんが買うものが分からないでしょうに……」

表情から読み取ろうと観察するが、これ以上は探れないと晶は諦めた。

どこかで会うか、はたまたこのまま会わずじまいか分からなかったが、これだけの美人である、覚えて置こうと保留する。

「マリア！ 何処行くつもりだ！？」

「どこでもいいです！」

ユナの呼びかけるが、その場に勇を居させたく無のdarou、マリアは強く反発する。

「ちょっと待て、流石にそれは失礼すぎるぞ！」

あまりの態度に勇も顔をしかめ注意する。

「ご、ごめんな……さい」

勇に叱られた事がよほど堪えたのdarou、この世の終わりだと言わんばかりに真っ青になっていた。

「メイさん、彼女のあの異常な姿はどういう事かわかる？」

「それは……」

晶は前から気になっていた事を質問するが、メイの態度から軽々しく答られ無いと理解できた。

「ふむ……今回はいいさ、まだ出会って間もないからな」

「ありがとう」

メイと話をしている間に勇が慰めたのか、マリアの顔色も幾分戻ったため晶は一つ提案する

「資金が豊富にあるといっても何が有るか分からないからな、節約していいか」

「あくまで軍資金……個人の買い物には……そうそう使えない……」

王に資金を送ってもらうにしても、遠くに行けば届くまでに時間がかかるものである。

手元にある資金が大いに越したことはないので、晶の意見にメイも頷いていた。

「旅の準備だけど、なにぶん始めてだから……何を買ってよいのやら」

マタギの技術に野宿の仕方も教わっていたが、異世界という特殊な場所なうえ、当然魔物も多くいる危険地帯である。

野性動物に襲われ難い前の世界での山の中と同じ感覚でいくと、危険と判断するのは当然であった。

「実は一通りの物はそろえて門の詰め所に用意してあるが、晶殿の分が足りなくな、その分を買い足さないといけない」

「ごめんなさい」

ユナの指摘に節約と言ったてまえ自分自身が負担かけているのだ、晶は申し訳なく謝るしかなかった。

「どうもありがとうございました」

頭を下げるマーガレットの両手には荷物が抱えられており、色々と歩き回り全て買い終えていた。

「こつちが悪かったからな、本当にすまなかった」

勇も頭を下げる。その後晶達は軽く手を振り歩いていくマーガレットを見送った。

「名残惜しいか？」

晶は勇の隣に立ち話す。

「そんなこと無いさ」

「本当ですか？」

勇の答えに疑いの眼差しを向けるマリアである。

晶は勇が嘘をついていると見抜いていた、ムツツリスケベの勇が

あのマーガレットの魅力的な身体に、興味を抱かないわけが無いと晶は確信していたのだ。

「本当だって、それよりも俺たちも行こうぜ！」

「そうだな」

そんなことを微塵も感じさせず勇は先へ進もうと促す、女性の目の前では紳士に振舞う勇が正直に言うわけがないと追及はせず晶は同意する。

「ああ、こつちだ」

ユナが先導を切り門を潜ると、眼前には一見のどかな草原が広がっているのが見えたが、見えないだけで少し進めば魔物が跳梁跋扈する魔窟であろう、危険だが魔王を討ち取るためには行かねばならない、こうして勇者一向の旅が始まったのだった。

脇役五

砂漠特有の水分を飛ばす高温のなか、人間と同等の巨体をもったサソリ型の魔物が缺を勇へ振るう、愚直なまでに単純な攻撃だがなかなか速度があつた。

元から有る運動神経を使い、素早くかつ最小限で避け、一足飛びで間合いを詰めよる。

太陽光を反射するレイピアが深々とサソリ型の頭部へ突き刺さつた。

昆虫ながら連携という頭脳があつたのか、はたまた偶然かは理解できなかったが攻撃の体勢から戻っていない勇の背中目掛け、別のサソリ型が特有の毒針を持つ尾で襲い掛かる、しかしながらその一撃が届くことは無く空へ舞つた。

「させるか！」

ユナがバスタード・ソードで切り落としたのだ、甲高い奇声を上げながらサソリ型がユナへ反撃する、しかしそれが魔物の致命傷となつた。

重いものを叩きつけた鈍い音が響く、一瞬停止するサソリ型の上には輝く白い鎧姿の勇がいた。

レイピアの先端を真下に向け一気に振り下ろす、体重が乗つていたのだろっ、頑丈そうなサソリ型の外皮を突き抜ける、奇声を上げ振り落とすかのように身体をねじるが瞬く間に動きが止まり、力な

く地面に伏すのだった。

晶の視界に数人の青い少女が冷氣と共に流れてきた、視線を向けると砂漠という場所にはそぐわない氷の彫像が乱立している。

ぺたぺたと青い少女が触っている分厚い氷の中には、先ほど勇達と戦っていたサソリ形もいれば周囲に溶け込むような黄色い猪も閉じ込められている。

微動すらしなのは既に命の灯火が消えたのかはたまた動けないだけなのか、晶には判断はできなかった。

「相変わらず魔術はすごいな」

「当然……」

勇から賞賛され、メイは小さくピースサインを向けていた。

砂漠に凍土の世界を作ったのはメイであつた、彼女いわく砂漠に出没する魔物は水属性の魔術に弱いということだった。

それを証明するかのように氷の塊はメイが放ったのはたった一発の魔術である。

「皆様大丈夫ですか？」

勇達の安否を気遣うマリアだったが、戦いぶりを見て傷は少ないと思つたのだらう、さほど心配している様子は無かつた。

晶から見ても先ほどの戦闘は余裕を持って対処しているのが分か

ったのだ、心配するだけ無駄であろつ。

「俺達大丈夫だ、晶は？」

「大丈夫だ」

「うお！ そんなところに居たのか？」

「いや、そんなところつて、一步も動いていないからな」

勇が周囲を見回すほどに存在感の無い晶は戦闘のときどうしていたかというと、実は殆ど動かず黙つて立っていただけである。

当然此処へくるまでに何度も魔物に襲われており、晶も最初は真つ先に襲われていたが、一度野宿しているときに魔物の奇襲を受けた。

闇夜にまぎれることが得意魔物であつたため見張りの隙を突かれいつの間にか接近されたが、最初に襲われるはずの晶は無傷であつた。

「しかしなぜそこまで気づかれないのか分からないな」

「なんとなく予想はつくさ」

神妙な顔つきなユナだつたが晶の予想外の返答に感心し続きを促す。

「影の薄さ、存在感の無さというのもあるだろつ、しかし一番の理由は勇だ」

「俺？」

「そうだ、勇の近くに居るとかなり意識が勇に集中する、こと戦闘の場合だとそれが顕著になるな、存在感ありまくりでかなり強いんだ、当然だろう」

本能に従って行動し、弱肉強食の世界なら弱いものから襲っていくはずだが、隠れる場所の無い砂漠でさえジツとしていれば見向きもされなかった。

非戦闘員という自覚があり、節約のために様々な鍋や水筒などの旅の道具を背負い、目立ちそうにも拘らず素通りされるのだ、運搬用につれていく駱駝には襲うのだから気づかれていないのが明白である。

「それだけ感知されないなら、暗殺行為が出来そうだがどうだ？」

「残念だけど無理だな……こっちから行動を起こせば気付かれる可能性が高い」

勇の意見に晶は首を振る、動かないでいれば背景に溶け込みやすいが、動けばそれなりに目立つからだ。晶は実験から分析していた、その上に殺すという動作では殺気も混じってより気づかれやすくなると予測できていた。

ちなみに実験とは一時期どこまで気づかれないか試したことがあったのだ、気配に敏感な人物——その人物は勇なのだが——に擦り寄ったり、背後からそっと近づいたりそのまま動かずに隙を窺ったことがある。

「お、お前まさか！」

その説明をすると何かを思い出したように勇が唐突に声を上げた、ありえないと言いたげに目を見開き、身体を震わせながら晶を指差している。

その答えとして晶は親指を立て、輝かしい笑顔を向け肯定した、勇と一緒に居る時にそのその辺にたむろしている不良っぽい人物に石を投げつけ、喧嘩をおこさせていたのだ。

「やたら絡まれやすい時期があっただけど、お前のせいかよこのやろう！」

「まあまあ落ち着けて、そのおかげでかなり魅惑な体つきの美人と知り合えたからトントンドろ？」

「ぐ！ それは……」

晶の答えに押し黙る勇であった。

「それにしても役立たずですね」

「ぐふう」

勇を実験対象にしたせいか冷徹なマリアの辛辣な言葉に思わず晶は胸を押さえる、事実だけに言い返せなかった。

「だから言っているだろう、もっと鍛えろ！」

「それでも頑張っているのだけれど……」

ユナが一喝するが晶は恨みがましく口にする、実は逃げ惑っていた晶に見かねユナが少しでも使えるように、ナイフの戦い方を教えたのだ。

残念なことにまったく接近戦の才能が無く、いくら頑張っても精々無防備な状態の相手に一太刀入れる程度である。

「はあ……弓矢さえあればな……」

嘯く晶にもマタギの技術があり、獲物を仕留めるすべはある、しかし基本猟銃の狙撃であつた。

運悪く魔術が発達し多くの人が使用できるこの世界では遠距離戦は基本魔術で行われる、故に弓矢の発達が遅く、有ったとしても太目の枝に紐を括りつけた粗悪なもの、とても使えるとは思えず唯一猟銃に近いクロスボウも当然無かつた。

「しかし流石砂漠だな、暑すぎる」

力なく口にする晶は砂漠の熱気に大分やられていた、砂漠に入るまえに光を遮る白い布を購入し、全員頭からかぶっていたが、現状では仕方あるまい。

日がそれなりに下がっているが、砂漠のど真ん中である。

見渡す限りの砂と容赦なく照りつける太陽、焼き殺されそうな気温、幸いなのは湿度が殆ど無いことであろうか。

「がんばれ……」

「メイさん……ありがとう……」

メイもマリアも普段に比べ大分元気が無かったがまだまだ歩けるようであった、魔術師と神官とはいえ従軍するための体力があるのだろう、ユナはほとんど疲れをみせておらず、戦闘もこなしながらその程度とは流石騎士ということだろう、歩く姿もいまだきびきびしている。

「晶、もつとしっかりとしろよ」

「お前は化け物かよ……」

そんな中ユナと同等の疲れしか見せていないのが勇であった、元々フェンシングをやっていて体力が高かったというのもあるだろう、それでも騎士という常日頃から鍛えているユナと同等とはどういうことか？ 勇の完璧ぶりにあきれ果てるばかりの晶であった。

「見えたぞ！」

太陽が地平線に隠れそうになるほど歩き続けたときユナの声が上がる、晶は顔を上げると少し先を先行していたユナが前方を指差してた、まだ大分先ではあるが茶色い川が流れており、周囲には草や木が生えているのが見受けられる。

「厩気楼だったら最悪だよな」

勇がとんでもない一言を発する、その瞬間晶はやめてくれと言いたげに勇を見据える、なまじ冗談ではない可能性があるのが悲しい

ところであつた。

見つけてから数時間あるいてようやく町へと到着し、その瞬間全員が安堵のため息を吐いていた。

日が沈み幾分涼しくなった町に人が多く歩いてしたが、かなり体力を消耗していたため判断が鈍ると情報収集は翌日からとなった。

女子と男子に別れ寢床を二部屋頼み各自部屋へ移動する、限界にきていた晶は即行でベッドへ倒れこみ睡魔へと誘われるのだった。

しばらくのあと喉の渴きを覚えた晶は大分疲れがとれた身体を起こし、水を貰いに一階の入り口のカウンターに向かう、夜の萱が落ち、蠟燭の明かりで揺らめくなかに先客が居た。

「勇と……ユナさん？」

片手には水が入った木製のコップを掲げ仲良く隣あつて座っていた、晶は新たな展開かと目を輝かせながら物陰に隠れつつ移動を開始する。

蠟燭のみの明かりのためカウンターのみ明るく、周囲の闇に紛れながら聞こえてなおかつ明かりが当たらない椅子に座る、来たばかりのようでも勇は伝承などを店主に話を聞いているところであつた。

勇が最近聞いた噂や御伽噺なども聞きだしていたためユナは首を

かしげる、伝承などなら分かるがなぜ最近ことである噂まで聞くのか疑問であつた。

「噂も聞くのか？」

「もしかしてこれを取った時に反応して入り口が出現とか、そんな仕掛けがあるかも知れないからな」

勇が懐から出した宝玉を取り出すのを見ながらユナも検討がつく、宝玉の周囲には勇者選定のような魔術が掛けられていたのだ、同様になにかしら封印の場所にも仕掛けがあると考えたのである。

「ガキのころに聞いた話だからしつかりと覚えいる訳ではないが……」

勇の言葉に促され、店主がポツポツと思い出しながら喋りだした。

要約すると、砂漠で迷った青年が砂嵐に巻き込まれ、それでも突き進むと突然見知らぬ建造物が出現、そこで砂嵐が収まるのを待っている、奇妙な人影が現れ出て行けといわれる、不気味思った青年は素直にしたがって砂嵐の中を歩くのか思ったが、不思議と止んでおり無事に村へと戻るといふ話であつた。

「それぐらいしか知らないな、年寄りとかの方が詳しく知っていると思うぞ、大概川の近くで涼んでいるな」

少し禿げ上がった頭と、暑い地域特有の褐色肌を伝う汗を拭いて座りなおした。

「此処に泊まった人とか街の人から聞いた噂はなにかある？」

「噂か……」

勇が尋ねると店主は首をかしげる、しばし考えたあと何か思い出したのかポンと手を打った。

「そういえば最近黒い牙とかいう盗賊団が出始めたらしいな」

「盗賊か」

王国に仕える騎士のユナは守るべき民が魔物と同様に、襲つていくということに思わず眉をひそめる。

「そんなものは残念なことにくらでもいるが？」

魔物が跳梁跋扈するこの世界でも、やはり人を襲う盗賊といった輩は多く居る、盗賊団が出るなどなら不思議なことではなく、噂になるほどでもないのだろう。

「それがな、少し特殊なやつでオキ砂漠限定で名が広がっているんだ、しかもそのなかに幽霊がいるんだとき。なんでも戦闘中いつの間にか近くにいるといった具合でな、行き成り集団で襲いかかってきて暴れるのはそこの盗賊と同じだが、逃げ出そうとした者の傍に、気が付いた時には見知らぬ人間に首を切り裂かれるんだとき」

噂が広がるということは、襲われながらも生き残った者がいたのか、生かして返したのだろう、もしそうならばその理由は一体何かとユナの頭に疑問が次々と浮かびあがる。

盗賊行為を行うなら余り有名になるのはまずいだろう、例えばこ

の道に凶悪な盗賊団がいるとなると誰も通らなく、そのうえ通ったとしても優秀な護衛を付けるだろう、下手すると討伐隊が結成される可能性が高くなる。

それなら密かに活動した方が利点は多い、皆殺しにしておけば噂になる速度もおそくなり、場合によっては魔物がやったとされるだろう、もちろん死体を検分し傷跡などからどちらがやったかわかることも多い

「ありがとう」

「こっちこそ礼をいいたいさ、ここ最近客が少なくてな、こうやって話をするのも久しぶりさ、ところで」

勇が礼を言いユナは口を潤すために水を含む、瞬間店主の顔が二タリとするのが分かった。

「そちらのお嬢さんが本命かい？ 他に客が居ないからってあまり激しくせんでくれよ」

瞬間驚きで水が気管に入りユナが咳き込んだが、勇は平然としたままであった。

「本命ってそんなわけ無いだろ、たしかに美人で凜とした輝きをもった女性だけど俺がつりあうはず無いよ」

「勇殿！ 何を言っているのだ！？」

真っ赤になって立ち上がるユナは褒められなれていないため羞恥心からか体を振るわせていたが、どこと無く嬉しさも感じていた。

「何って、思ったことを言ってるだけだ、特に変なことは言っていないだろ？」

自然体で口にする勇は本気で言っているのがユナにも分かり、怒るわけにもいかず、また言い返せることも無く真っ赤になりながらおとなしく席に座る。

「つりあわないってお前さんも結構な上物じゃないか」

「いやいや気のせいだろ、ユナは髪も肌も綺麗だし、背筋も伸ばして威風堂々としていて威厳があつてカッコイイ、でも時々みせる女性らしいちょっとした仕草とかが魅力的だろ」

女性ながら騎士になった故かきつい印象を与えるためか、もしかした両方かもしれないがほとんど男は寄り付かず、また近くにいた男性も堅物なものが多かった、そのため女性として褒められることに慣れていないユナは終始真っ赤に染まりながら水を口にすることなく、下を向いているのだった。

朝になり全員で近くの食堂で朝食を済ますため外に出た晶は昨夜は良いものが見れたと感慨ぶかげに周囲を見渡す、砂漠にある町だったが木もそれなりに生えており、草も膝ぐらいまで伸びている、もちろん熱帯雨林のように茂っている訳ではない。

ユナの説明によると砂漠が直ぐ近くに広がっているが此処は川も

流れており、意外と地下水とかもあるそうだユナの説明に納得しつつ再度周囲を窺う、暑い地域ゆえに褐色の人が多く、主に暑さ対策なのだろう白い服を着ている。

伝統衣装なのか、男性は腰に一枚布を巻き、女性は元の世界でいうサリーと似た形の服をまとっている姿が多い、まだ朝早いが気温が上がる前に活動しようということなのだろう、人によっては既に働き出していた。

「実は昨日、宿屋の店主に聞いた御伽噺がある、結構それっぽいかな、後念のため噂も何かヒントになるかもしれないから、皆も聞いてくれ」

勇が話を皆に聞かせる、晶は知っていたが盗み聞きしていたことは秘密である。

「奇妙な人物はもしかしたら……鎧を着た勇者……？　そう考えると砂嵐のなかに何か建造物がある……？」

「その可能性は高いな」

メイの推測に晶は同意する。

「まだ他にも聞いてみないと分かりませんよ」

「そうだな、まだ情報が足りないからその話だけで決めるのは早計というものだ」

マリアとユナは二人に忠告する、かなりそれっぽい話で決めるのはまだ情報が足りない。

まだまだ話は聞けるだろうということで解散し、昼頃に又この食堂で集合ということになった。

「さて何か面白い話があったか？」

食堂に集まり各々好き勝手に座る、昼という時間帯だからか賑わっており、日が高く熱い時間帯だけに直射日光があたる道には殆ど人が居ない。

「色々聞いた……でも一番それらしいのが……店主から聞いた話だった……」

「そうだな、噂の方も黒い牙ぐらいだったな」

マリアの意見にユナは同意するように頷き勇達も同じ反応であった。

「当て推量で砂漠を歩き回るのは自殺行為だろ？」

勇がどうすると言い含める、それとともに晶がため息と共に丸テーブルに突っ伏した、砂漠を渡ってきた時のことを考えてぐったりしたのだ。

その時黒い少女が漂っているのを目で追っていると、何処かで見ただ人が席を探していた。

（あれって……えーっと……だれだっけ？）

頭をひねくり回しなんとか思い出そうとするが思い出せない、晶

が上体を起こし記憶を呼び起こそうとして自然に女性を目で追う。

「もしかして、マーガレットさん？」

同じく見ていたのか勇が席を立ち晶が見ていた女性に近づいていく。

振り返った人物の顔と勇の言葉から晶は思い出していた、王都で会ったマーガレットで暑い場所だからだろう、半袖で膝辺りまでのスカートをはいている。

「あらあら、お久しぶりです」

マーガレット変わらず頬に手を当て笑顔である。

王都での事を思い出したのだろう、マリアの眉間に皺が寄る。

「久しぶりだな、こっち座れよ」

「マーガレットさんはこっちで良いですね！」

勇も笑顔で答え隣の席に促すがマリアが強引に割り込み自分の隣に座らせた、勇から右回りにマリア、マーガレット、ユナ、メイ、晶となっている。

「勇さん達こんな所でどうしたかしら？」

マーガレットは相変わらず頬に手を当て微笑んでいた。

「このあたりで伝承とかを聞いて回るところだ」

「伝承ね……」

勇の台詞にマーガレットは首をかしげる、その様子に何か知っているのかと全員が注視した。

「そうね、砂漠のどこか祭壇があるって聞いたことがあるわよ」

「本当か!？」

思わぬ情報だった、身を乗り出しユナは聞き返していた。

「えーと、なんだったかしら？ たしか昔力が試される祭壇があつて今でも砂漠のどこかに眠っているという詩みたいなのを聞いたことがあつたわね」

「もう少し詳しく話せる？」

大きな情報だと感じたのだろう、勇が促しいわれるままにマーガレットが歌うかの様に話し出した。

「勇気有る者、月に導かれ進むは砂の世界、砂と風に守られし祭壇、守りしものに挑み打ち勝つ者のみ大いなる力の雫を得るだろう、だつたかしら？」

マーガレットの詩は予想以上に有効な情報に晶は思えた、お年よりのや色んな人が集まる食堂で聞いても宿屋の店主と似たような話しか聞けなかったのだ、全員同じ思いだったのだろう顔を突合せ相談し合った。

勇気有る者は勇者、月に導かれ進むは砂の世界から月を目指して砂漠を突き進む、砂と風に守られし祭壇から砂嵐の中に祭壇があると予想がついた、そしてそれが最も納得いく結果になった。

「よし、それで一旦進もう、月を目指すからやっぱり夜出発ということか」

勇判断に晶は同意する、これ以上情報が得られない可能性が高く、足踏みしているよりは進んだほうがよいだろう。

「しかし月を目指して本当にたどり着くのか？」

「どういうことだ？」

勇が続きを促す。

「月も太陽と同じように移動するのだろ？ 東の地平線に顔を出した時から頭上を経て西に沈んでいく、ただ単に月のあるほうに進めばいいのか？」

もつとも他に何かあるのかといえば晶には思い浮かばなかった。

「そうかもしれない……でも勇者関連だから……月を目指していけば……たどり着く魔術が掛けられているかも……」

「そうですね、神殿の泉にも選定するような魔術がかかっていましたから、その可能性は高いと思います」

メイの意見に同意するマリア、結果やはり月を目指して進む事になった。

「そうだ、いい話聞かせてくれたお礼に、此処の食事代おごるよ」

「あらあら、偶然知っていたってただだから気にしないでいいわよ、それにこの前もお金を出してくれたから、お礼なんていらないわ」

勇がお礼に奢ろうとするがマーガレットは遠慮しているようだった。

お互いに譲らずお礼させてくださいとか、いえいえそんなとか言い合っている、その姿は晶から見てもまさにいちゃついている様に見えない。

突然テーブルを叩きつけた音が響き渡る、二人の様子に嫉妬したのだろっ、マリアが机を叩き立ち上がっていた、そしておもむろに声を張り上げた。

「借りを貸したということではいつか返せば良いじゃないですか！
そうしましょう！」

余りの迫力に思わず頷く二人であった、その一連を見てユナとメイは勇になにをやっていると呆れた視線を送り、そしてやっぱリニヤニヤと勇の修羅場を楽しむ晶であった。

脇役六

マリアが一喝したあと料金を払いマーガレットを見据える。

「明日は早いので！ それでは！」

鼻息も荒く勇を強引に引っ張り出ていく、まさか出て行くとは思わなかった晶達は暫く呆気にと取られていたが、すぐさまマーガレットに三人は頭を下げマリア達を追いかけるのだった。

晶達がマリアを追いかけて戻った宿屋の一室では一風変わった展開が発生していた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「分かった、分かったって！ だから頭を上げてくれ……」

幼児後退を起こしたように連呼するマリアに、勇が困り果てているのだった。

「勇、何したんだ？」

マリアが酷く気落ちしながら立ち上がるのを見届けて、晶は小声で話しかける。

「とくに何もしていないさ、部屋に戻ったとたんにこんな状況に……」

勇もマリアを見ながら小声で返した。

「たぶんだが、部屋に戻った頃には冷静になったんだろう、前に勇に叱られたのを思い出したんだろうな」

女性の涙にはやはり弱いのは勇らしいところで、目が潤み泣き出しそうなマリアの顔を見たのだろう、申し訳なさに頭をなでて慰めていた。

「とりあえず、もう一度マーガレットさんに会って謝ってくるか」

「いや、オレが行って頭下げてる、その間に今後の予定でも考えてくれ」

出て行こうとする勇を押し留め、晶が変わりに出て行く、リーダーである勇とこの世界の住人である女性三人で行動を決めた方が有効だろう、そう晶は思っていたの行動だった。

食堂に着いた晶は店内を見回す、それほど時間も掛かっておらず直ぐ見つかるかと高を括っていた、しかしいくら探しても見つからない。

まだまだ人も多いので運悪く見つからないかと思いきや直ぐ傍を歩くエプロン姿の店員に聞くことにした。

一声かけるとやはり晶に気が付いていなかったのだろう、悲鳴を上げてお盆を胸に抱える。

「あの辺りに座っていた、深緑の髪と同じ色の瞳をした色白の美人を見ませんでしたか？」

「いいえ、そのようなお客様は見ませんでした……」

店員が首を傾げるが一向に思い出す様子は無かったため、晶は礼を述べて新たに別の店員に聞くが返答は同じである。

砂漠特有の褐色肌が多いなか色白なら目立つはずだが、全く見つけることが出来なかった。

「スマン、探したけど会えなかった」

いくら捜しても見つからなかった為晶は宿へ戻っていた。

「そうか、少し失礼だったかな、今度会うことがあったら謝っておくか、そういえば明日の夜出発するぞ」

「明日か、わかった」

此処にたどり着くまで消費した物にはすぐさま用意できない物もあり、前日に頼んでおくため明日となったのである。

次の日一通り荷造りを終えた一行は夜に備えるために明るいうちに睡眠をとることになった。

晶はベッドで横になるがこの暑さと開け放った窓から入ってくる眩しいほどの日光である、一向に眠くなる様子が無かった。

ふと隣のベッドを見るがそこには勇は居ない、同じく眠れないのだろう、旅に何か思うところがあるのか神妙な顔をしながら、窓際に椅子に座り外を見ていた。

全く寝むけが来ないと晶も窓から外を見ると分厚い壁の建物は全て窓も扉も開け放っていた、日陰が僅かに涼しいのか外には人が居ないが建物内には意外と人が居るものである。

「何見ているんだ？」

晶が聞くと勇が顎で指す、その方角に顔を向けるが特に面白い物は晶には見えなかった。

そのことに勇が気付いたのか口で説明し、晶は改めてその場所を見ると窓を開いて着替えをしている女性が見えた。

「何覗いてんだよ！」

晶が吼える、顔を引き締めて外を眺める姿は風景画の様な情景だった、真剣な顔をしながら考え姿から何か思うところがあるのかと思ったのだ、しかしやっていたのは単なる覗きである、叫ぶのも無理からぬことであつた。

「だって窓全快なんだぜ！ 目が行くのは当然だろ！ 晶だって本当は見たいんだろ！」

「だからって見んなよ！ それに覗きなんぞしたくないわ！」

晶が注意するが勇は全く気にせず、それどころか晶の肩に手を置き笑顔を浮かべている。

勇のの態度に不振に思う晶だったが次の瞬間に硬直した。

「俺が知らないと思っっているのか？ お前、褐色肌が好きなんだろ

？」

図星である。

「だったら……一緒に覗こうぜ、兄弟」

勇のスケベ心からの行動を見ている晶は半面教師で余りしたくは無かった、しかし晶だって男である、思春期真っ只中である。

熟考し、やはりやめようと言おうとした瞬間にだらしない顔した勇に頭をつかまれ無理やり振り向かされる、そこには驚愕の映像があった。

「着替え終わってるー！」

月が地平線から顔を出した頃に一同は運搬用の駱駝を連れて宿を出発する、節約のために連れるのは一匹のみで晶が持てない分を乗せていた。

なにぶん晶は非戦闘員なうえ敵に見えにくいのである、せめて自分の分は持てと言われたため背負い袋に詰め込んでいる。

砂漠では湿度が低い結果なのか、はたまた植物が少ないせいなのか不思議と冷え込む、昼間の暑さに比べたら幾分ましかもしれないが、そんな月夜を出発してから三夜ほどすでに回っていた。

「本当に目標に向かっているのか？」

「たしかにな、だが信じて進むしかないだろう」

半ば呆れ顔の勇の意見に同感だったのだろう、ユナは眉をひそめながら嗜めていた。

しかし勇がそう思うのも無理は無く、ずっと同じ風景が延々と続いているのである、しっかりと進んでいるか疑問に思うのは仕方が無い。

丁度砂の山一つ越えた辺りで先頭を歩く勇が急に立ち止まる、どうかしたのかと晶が勇を見ると厳しい顔つきで片手を上げ、全員に停止を促していた。

非常事態と認識したユナが砂埃を上げることなく器用に勇の隣に移動し同じ方向を見る、勇が何かを指差しその場に伏せて相談を始めた、何事かと晶達も同じ位置までたどり着き、先ほど勇が指差していた方角に視線をやる。

深夜だったが空気が清んでいるうえ、満月であるため結構遠くまで見渡せた、一瞬晶は砂嵐かと思ったがそれにしては小さい、砂嵐の高さは数百メートルに及ぶのである。

晶が目を凝らすと、それらは十数匹におよぶ駱駝の集団、いや、少々分かり難いが黒いマントを羽織っている人間が乗っていた、瞬間脳裏に浮かんだのは噂になっていた黒い牙であった。

「黒い牙ですか？」

「その可能性が高いな」

マリアも同じ答えにたどりついたのだろう、ため息をつく姿は面倒くさそうであった、同意するユナだったが一団を睨む視線は汚物を見ているようであった。

「何でこんな時に、しかもあっちからくるんだ」

晶が悪態をつくのも無理からぬことである、集団は月を背に迫ってくるのだ、その上隠れる場所も無く回避は不可能だった

確率はかなり低いが未だ確定したわけではない、単なる旅の集団という可能性があるため勇達は武器を抜かずに接近する。

その一団は一直線に勇達に接近し相対すると武器を手に取り駱駝から降りた、盗賊と確定した瞬間であった。

勇達は武器を抜き放ち身構える、晶は戦闘の邪魔にならないために、一団から見え難いよう勇達の後ろへ移動し離れる、もちろんゆつくりと派手な動きをせず、ばれないよう細心の注意を払いながらである。

「勇者達だな」

先頭にいた大男が威圧しながら口を開いた、彫りの深い顔にはもみ上げから口周りまでしつかりと生えた髭、髪も髭も癖が強いのか縮れているため、男らしいというより何だか汚らしい印象を受ける、そんな厳つい大男が断定する口ぶりから狙っていたことが窺えた。

「違うな、そういうお前達は黒い牙とお見受けするが？」

無駄な戦闘を避けたいのだろう、勇は臨戦態勢で探りを入れる。

「ふん、勇者ご一行に知られているとは光栄だな、しかし嘘をついても無駄だ、聞いていた通りだからな」

確信があるのだろう鼻で笑い馬鹿にする口調であった。

（聞いていた通り？ 誰かに雇われているのか？）

晶は大男の言葉から予測を立てていた、祭壇を目指すと決めて、此処までくるのに特に何処かへ立ち寄ったことはない、最速でここまでたどり着いたはずである。

祭壇へ向かうことを話したのは精々騒がしいレストランのみであった、それでも先回りしたということは町の中からすでに狙われており、そいつが黒の牙に依頼をしたということだろう。

「いきなりだが、死んでもらおう」

大男が一言発すると同時に集団の男達も勇達を包囲する、動きを阻害するのだろう男達全員息を合わせたようにマントを外す。

「きゃ！」

その瞬間マリアの口から小さく悲鳴が漏れ、勇達の表情も引きつり、離れていたため黒い牙の円陣から外れていた晶も血の気が引いていく。

マントの下に見たものは――

毛が一本も無い頭。

褐色を通り越し真っ黒に日焼けした皮膚。

月の光を反射する汗にまみれて光る体。

力めばはちきれそうな暑苦しいまでに鍛え上げた筋肉。

そして

身に着けているのはたった一枚の際どいパンツ。

正におぞましいモノを見たのだ、そんな姿が髭面の大男含め四方八方に立ち並んでいるのである、特殊な性癖を持つならまだしも正常人には途轍もなくきついだろう。

「円陣を組め！ 絶対対に後ろを取られるな！」

声を振り絞る勇の一声に同調し全員途轍もない気合をみせる、それはそうだろう暑苦しくも汚らしい男たちに触りたく無い、まして動きを封じるために羽交い絞めなどという事態はなんとしても避けたい。

「気持ちわるいな、おい」

晶達の気持ちを代弁するように嫌な顔しながら勇が気持ちを口にする。

「俺達の何処が気持ちわるいか!？」

反論とともに黒い牙の一団は各々力んだ、何処で知ったのか自然とそうなるのか、筋肉の大会でみる体勢になる。

ムキツと露になる筋肉と浮き出る太い血管が熱さを増し、そして爽やかつもりか歯を見せる笑顔、しかし虫歯や歯抜けやら黄ばんでいて爽やかとはほど遠かった。

途端口元を押さえる勇達であつたが特に酷かつたのは晶で記憶から即刻抹消しようとし気を失いかけていた、なにせ勇達を囲む黒い牙の外にいるのだ、目に入ってきたのはパンツ食い込む尻である、眼に毒極まりない。

「なんだその態度は！」

勇達の態度が心外だったのだろう、黒い牙の一団は怒り心頭に武器をかまえた。

——アイスアロー——

無詠唱で撃ちだされる複数の氷の矢、射程ギリギリでメイが撃つたのだ、それを皮切りに砂を巻き上げ黒い牙が一斉に襲い掛かる。

ハルバート、クレセント・アックス、カットラス等、様々な接近戦武器を持ち牙を剥いた。

勇達はそれら全てを弾き、避け、円陣を崩さないよう、背後を取られぬよう立ち回り迎え撃つ、激しく打ち合い武器が激しくぶつかり火花を散らし、徐々に戦いは勇達が優勢になりつつあった。

「くそ！　なんだこいつ等、思ったよりやりやがる！」

大男が悪態をつく、接近戦一辺倒の黒い牙達は円陣を崩せずにした、勇達の実力を見誤っていたのだろう、そして自分達が得意とする砂漠での戦闘ということもあったのか慢心していたのが晶も見ていて分かった。

勇達は動きづらい砂地だったが基本迎撃するだけに専念していたのだ、多少は足を取られていただろうが迎撃するだけだったので動きを最小限に抑えられていたと考えられる。

「これなら大丈夫か——」

観戦していた晶に突如何かにぶつかる、衝動的に振り向くとそこには見知らぬ人が居た、砂と似たような黄色で厚手の布を頭からかぶり口元を布で覆っていた、晶の存在が想定外だったのか黒い瞳は驚きに見開いている。

お互い唐突な出来事だったのかジツと見詰め合う、晶の頭に黒い牙にいる幽霊の話がよみがえり、事態を把握し行動を起こした。

すぐさま踵を返しその人物から離れようとするが相手の方が上手であった、後ろから乗っかられ全力で逃げ出そうと晶は暴れるが一向に抜け出せる様子は無く、腕を後ろに捻られ取り押さえられていた。

「何者だ」

無理やり立たされ、中性的な声と共にナイフを当てられた晶は尋問されるがどう答えるか頭を捻る、

「答える」

「ぐ、勇の……勇者達の仲間だ……」

早くしろということなのか刃を食い込ませてきたのだ、ろくに考
える時間が無かった晶は白状するほか無かったが全くナイフが引つ
込む様子がなく無言が続く、そしてそのまま晶を押しながら勇達へ
と近づいていった。

「そこまでだ！」

ナイフの人物の声が響きわたると同時に全員動きを止める、月明
かりのなか状況を把握した勇が激昂するがナイフの人物は意に介さ
ない。

「撤退するぞ！」

「しかし御頭——」

「タウロ！ つべこべ言わずに従え！」

タウロと呼ばれた大男は不満を口にしているがナイフの人物は言葉を
遮り命令を下す、タウロ居は小さく舌打ちをして渋々従い周囲へ命
令を下した、それにあわせ周りの男達も撤退し始めることから、ど
うやらナイフの人物が頭のようにであった。

「こいつを返して欲しかったら、オレ等のアジトに來い、場所は貴
様らの目的地と同じ砂嵐の中だ」

言い放つと晶の腕を縛り上げ駱駝に乗せ、そのまま自身も乗り込み走り去っていく、それを悔しげに見るしかない勇達の姿に晶は申し訳なく、そして悔しく思うのだった。

「御頭、何で撤退したんですか？ あのまま人質で動けなくして、やっちまえばよかったんじゃないですかい？」

この撤退が非常に不満なのだろう、タウロが憮然とした顔つきで晶達の隣によせる。

「ふん、あのままだとこつちがギリ貧で殺されていたさ、なら一旦体勢を立て直して有利な場所で迎え撃った方が確実だ、それにこいつが何するか分からないからな」

タウロが何か言いたげだったがナイフの人物は睨みを聞かせて黙らせていた、そしてタウロの駱駝に近寄ると晶が邪魔だと言い放つ。

タウロは嫌そうな顔をしつつも晶を引つつかみ力任せにうつ伏せのまま移し変える、ナイフの人物が嫌いなのかはたまたこの場に居たくは無いのだろうか？ 不機嫌な顔をしながら先行する一団を追いかけた。

「お前ずいぶん大人しいな、何か企んでいるのか？」

無言だったのが怪しく思ったのかタウロが訝しげに晶を睨む、ほとんどされるがままの晶がさぞかしおかしいのだろう。

「企んでいる？ ふふふ、運動能力も低い自分が暴れたところで、ボコボコにされるのが目に見えています、大人しくしたがつていた方が痛い思いはしない」

答えつつも晶は逃げる腹積もりである、縛られながらもどこかに隙は無いか付け入る場所は無いかと大人しくしつつも機会を窺っていた。

晶は勇達をおびき寄せる餌でしかなく、このままアジトへ連れて行けば殺される可能性が高かった、死体でも勇達に生きていると思わせればいいのだ、そのうえ色々面倒を見る手間も省ける。

ただ道すがら殺される可能性も大いにあり、刺激しないようにするため丁寧な口調もその一つである。

「まったく、邪魔なら連れて来るな、先代の子供で継いだからって偉そうにするんじゃないやねえよ、畜生が」

タウロはあの人物が頭になっている事にかなり不満を持っているようでブチブチと悪態をつく、そのときにはすでに先行する一団にたどり着いていた。

タウロの愚痴を聞いた部下もどうやら同じ思いらしく各々不満を言い合う、もちろん後方に居るだろうナイフの人物には聴こえないように声を小さくしている。

その現状を見た晶に天啓がひらめいた、黒い牙内では大分不満が溜まっているようで、とくにナイフの人物が頭にいることが特に不服らしい。

その辺りを突いて部下達が反乱を起こせばその混乱に乗じて逃げられるかもしれない、勿論上手くいくかは分からなかったが今現状で晶が出来ることはこれぐらいしかないと確信していた。

「あの、少しいいですか？」

「だまれ、殺すぞ」

タウロは視線も向けず面倒くさげだったが晶は今しか機会がないと言葉を続けた。

「それだけ不満でしたら、貴方が率いて力ずくで地位を奪ったらどうです？」

「……何だと？」

タウロが視線を向ける、言葉としては疑心に塗れていたが瞳の奥にはどこか期待を持っているようであった、晶は内心ほくそえみながら煽る。

「だから、反乱起こしたらどうか？　と言っているのです、それに皆さんあの人が頭なの不満なのですよ？　だったら皆さんで襲えば流石に勝てるのでは？」

晶はうつ伏せ状態のため首を上げ、そのまま視線を周囲の部下達にこのままでいいのかと投げかける、やはり鬱憤がたまっていたのか、はたまた切欠が無かったのか序所に同意する声が上がっていき広まっていく、そして晶は最後の決め手を言い放つ。

「それにタウロさんが頭になれば万事上手くいけますよ」

「……ククク、確かにそうだな、先代からの義理で従っていたが継いで頭になっただけの奴について行く意味は無い、これだけの人数で襲えば……」

己が頭に着いたときのことを想像しているのだろう、タウロが声を押し殺して笑うのを見た晶は掛かったと確信する、後は反乱という状況の中で自分に意識がそれた瞬間に逃げるだけである。

タウロが速度を落としていく、部下達も同じく速度を落としタウロの命令を待っていた、その顔は獰猛な笑いが浮かんでるのだった。

脇役七

「てめえ逃げるなよ」

タウロは邪魔とばかりに晶を砂地へ落とし釘を刺す、それを聞いた晶は思わず口角が上がるが顔を伏せて隠す、千載一遇の好機を逃すつもりは無かった。

「何かあつたのか？」

追いついたナイフの人物が何の疑いもなくタウロへ近づいていた、笑いをなんとか堪えた晶は顔を上げると、先ほどはまではマントでみえなかったが今は頭と口元を出していた。

晶は改めてナイフの人物を見た、年齢は二十ぐらいだろう若々しく鋭い黒い瞳は眼力がすごかった、黒い髪は短く耳辺りで切っているが癖が強いのか外に跳ねている、黄色いマントの中は袖は無く、腹部を出したシャツに足の付け根までしかない短パンと軽装である、晒される腕と足は細く色は褐色であった。

「ああ、あつたさ」

嘲るタウロの物言いに何か感づいたのだろう、ナイフの人物は見据えながら何時でも動けるように身構えていた。

「これから俺が黒い牙を率いていく、頭は、いや、ジャース、お前はお役御免ということだ」

ナイフの人物の視線を完全に無視して、タウロは腰に挿している

カットラスを抜き、切っ先を向ける。

「お前一人でオレに敵うとでも？」

ジャースと呼ばれたナイフの人物は腕に自信があるのだろう鼻で笑い蔑む、軽やかに飛び降り手にはいつの間にか手には木目のような波打つ模様が浮かび上がる短剣をもっていた。

これはダマスカスナイフと呼ばれ、特殊な製造工程を経て模様が浮き出た鋼材を使用した強固なナイフである。

「俺一人だけじゃないさ」

タウロが虚仮にした口調と共に片手を上げる、その合図と同時に次々と周りの部下達も駱駝から降り得物を構えた。

多勢に無勢という状況だからだろう部下も下卑た笑みを浮かべている。

「素直に頭領の証を俺に渡せ、痛い思いはせんぞ」

「だれが渡すか！」

胸元を隠すように片手で押さえジャースは反発する、しかしその反応はまずかった。

危機が迫り大事な物を取られる、そのような条件下だと無意識に取られたくない物へ手を伸ばしたり、又は視線を送る等してしまうのである、タウロは理解したのだろう、笑みを深くすると片手を下ろし明らかに軽視した命令を追加していた。

「あっさり死んでもつまらないからな、ほどほどにしておけ」

一斉に襲い掛かる部下達と同時に晶は巻き込まれないように全力で離脱した、一瞬タウロと目が合うが情けない晶の姿をみて楽に捕まえられると思っているのだろっ完全無視であつた。

少し離れたあと出来るだけ視界に入らないよう身体を伏せて息を殺す、乱雑に縛つてあつたため解け安く両手が自由になっていた、そして状況を把握しやすくするため振り返る。

そこではジャースは素早い身のこなしで軽々避けていた。

「なんだ？ 見にくい？」

晶は目を擦り集中するが黒と黄色の衣装によるものなのか、周囲に溶け込むように分かりにくくなっていた。

かすり傷付いている様子は無かつたが、驚異的な回避を行うジャースもやはり人間であつた、避ける事に手一杯なのだろう、証拠になかなか攻撃に移ることも無く盗賊団も無傷である、四方八方から襲われるのだから仕方が無いだろう。

「んん？？ どうしたんだ？」

「はあ！ はあ！ うるさい！」

愉快に笑うタウロに対してジャースは徐々に体力がなくなってきたのか時間と共に動きに繊細さが無くなってきた。

同時に所々小さな切り傷が付き始め、それでも暫く避けていたがついに足を砂に取られ転倒し、ジャースは素早く立ち上がったがその息は酷く荒い。

「もうお仕舞いか？」

高みの見物を決め込んでいるタウロが楽しそうに問う、周囲の部下達もまだまだ余裕があるのかニヤニヤと笑っている。

「さて、証を渡してもらおう」

駱駝から降りたタウロが近づく、ジャースはフラフラになりながらもダマスカスナイフを振り翳した、最後の力を振り絞ったのかそれなりに勢いはあった、しかしあくまでそれなりである。

「そんなものが当たるか」

タウロが軽く避けるともはや体力の限界かジャースそのまま体勢を崩し、そこを止めとばかりにタウロが胴を殴りつける。

ついにぐったりしたジャースだったが、意地でも取られまいと無理やり身体を動かしようとして伏せになった。

「無駄な悪あがきしてんじゃねえよ！」

タウロが力づくで仰向けに転がされ、その時首元から黒一色の牙が付いたネックレスが飛び出しタウロは強引に引きちぎった。

「いままでご苦労さん、せいぜい生き延びることだな、こんな砂漠のど真ん中じゃ無理だろうがな」

高笑いしながらタウロが撤収の合図をする、それとともに部下達も駱駝に乗り去っていくのだった。

そのときにジャースが使っていた駱駝や水なども持っていてしまったのだ、砂漠で水無しは死刑宣告された事も同然である。

「ふう、行っただか……」

その様子を見ていた晶は一息ついた、目論んでいた通りに逃げ出すことに成功したからだ、持ち前の影の薄さ、そしてタウロが頭領になったことにより浮かれたのだろう、頭の中から晶のことが消えていたようだった、証拠にタウロ達は遠くで砂煙を上げていた。

「さて戻ろうか……あ……」

立ち上がった晶は目の前に広がる一面の砂漠に、あることが脳裏によぎる、はたして戻るのかということであった。

月を背に歩けば戻るのかと思えばかなり怪しく、祭壇へいくのはかけられた魔術かなにかでいけるだろう、しかし戻りに同じような効果があるようには思えず、なおかつ砂嵐の中にある祭壇へ進むとした場合一人で危険な砂漠を歩けるのかという疑問もあった。

「やばい……早計だったか？」

晶の額に汗が垂れる、黒い牙から逃げられたのは良いが砂漠はド素人、当然当てずっぽうに歩いても無意味である、さらに魔物に襲われた時手立てが無いのは非常に危険だった。

晶は危機的状況が変わらないことに茫然自失になっていたが、その時咳き込む声が聞こえ晶は首を回すと視線の先にはジャースが息を荒げながら仰向けに倒れている姿があった。

「そつえば居たな……ん？ 待てよ」

晶に天啓が舞い降りる、砂漠を拠点としていた黒い牙の元頭である、砂漠を知り尽くしているだろう、ならば砂漠を案内してもらえば無事たどり着くのでないか？

交渉材料もとりあえずあり、殺される可能性がある危険な賭けだったが選択は一つしかなかった。

「あの、すこし良いですか？」

息が整ったことを見計らって晶が声を掛けるとジャースは鋭い視線を向ける。

「なんだ？」

明らかに敵意むき出しのジャースであったが晶は毅然とした態度で交渉する。

「今から自分は砂嵐の祭壇に行かなければいけません、道案内をさせていただきませんか？」

ジャースに砂漠の歩き方と護衛も兼ねてもらえればあとは戻るか進むかである、戻るよりも連れ去られたと思われる祭壇に向かい、勇達と合流したほうが良いと晶が判断した結果である。

「なんでオレがお前のために案内しないと行けないんだ？」

突き放す物言いだったが晶にはあることから従うと確信があった。

「もちろんただとは言いませんよ」

晶は懷から水の入った袋ともう一つ空の袋を取り出し半分に分ける。

「半分貴方に渡します、どうしますか？」

「どうしますか？ くく、お前を殺して奪っちまえばいいよな？」

ジャースが凄むがその瞬間晶は片方の水袋を地面に落とした。

「な！？ てめえ馬鹿か！ 何てことしやる！」

完全に無視しながら晶は落とした袋を拾い上げ再度二つに分ける。

「再度問います、案内するか？ それとも二人で朽ちるか？」

ジャースは手持ちの物をすべてタウロに持っていかれたため、生命線である水を交換条件に出されたなら従うしか道は無いだろう。

「チッ分かったよ」

相手の思うようになるのが気に食わないのか、悔しげな顔つきをしながらジャースは渋々案内をすることとなった。

「道中お互いに助け合いましょう、えーと？」

これから二人きりである、敵意むき出しのジャースに何時までも睨まれ続けるのは勘弁と晶は手を差し出す。

「……ジャース……」

「自分は八頭晶です、よろしくお願いします」

握手を求める晶だったが悪態をつくだけで応じことなく、ジャースは歩き出すのであった。

月が輝く夜の砂漠を黙々と二人で歩く、あれから二日ほど立っていたが時々砂漠でのタブーや必要なことを実地で教えるぐらいしか話をしなかった。

晶は何か話そうかと思案していた、無言で歩いていると広い砂漠でもやはり空気が重く感じるのだ。

少しでも重い空気を何とかしたい晶は雑談でもすれば幾分楽になるのかと共通の話題を探す、しかし知り合って間もない上に敵対関係だったのだ、何も浮かばず晶は口を開いたり閉じたりするだけに終わってしまう。

「おい、お前何者だ？」

「え？ オレ？」

考え事をしていて不意打ちで話しかけられ形になり晶はビクリと体を震わせる、無言で歩いていたところに突然話しかけられたのだ驚くのも無理は無い。

「お前しか居ないだろ」

振り向きながら問いかけるジャースの目は疑問に溢れていた、それでもやはり鋭く物怖じしてしまう晶であった。

「えっと、オ、自分は――」

「普通に話して構わねえよ」

ジャースに言われるが晶は躊躇してしまう、水を渡したがジャースが本気になればいつでも晶は殺せるのだ、普段の口調に戻すかですます口調を続けるか迷う。

無言が続き時間が経過するにつれてジャースの視線が鋭くなつていく、相手の機嫌を損ねるのは得策ではないと晶は腹をくくり話し出す。

「オレは極普通の一般人だけど？」

晶の答えに大いに不満なのだろう、睨み殺されると勘違いするほどの眼力でジャースは睨みつけた。

「そんなわけ無いだろ？ お前達を襲った時まったく気が付かなかったぞ！ 一体なにしたんだ？」

ほとんど癖でやっているため晶自身は特に意識してやっていないのだ、そう伝えると呆れ顔になるジャースであった。

「その才能もつとうまく生かせば暗殺、盗みなんて楽勝だろうに……」

ジャースはもったいないとばかりに首を振る。

「仲間にも言われたよ、でも殺気や戦闘中とか周囲に意識集中している状態で近づくと感づかれる」

だから無理だと晶は肩をすくめるだけであった。

「なるほど……」

「ジャースさん？」

思案顔のジャースの顔を覗き込む晶に不吉な予感がよぎった。

「よし、お前に暗殺の方法教えてやる！」

「はあ！？」

突如ジャースは顔を上げ晶の肩に手を置くが突然教えてやるといわれても困る晶であった、教えたぐらいで簡単に暗殺できれば苦労はしないのである。

「というか、お前も戦闘に参加しろよ！ オレばかり魔物退治しているじゃねえか！」

道中魔物に襲われた時、相変わらず風景に溶け込んだように無視される晶である、当然残ったジャースに魔物が殺到するのだ。

しかしジャースは強かった、得意とした戦法は暗殺術でありその技術は凄まじかった、魔物の直ぐそばに立っているにもかかわらず、魔物が見失うほどである、そして急所を的確に突き死に至らしめるのである。

「待ってくれ！ そんな事いきなり言われても簡単に出来るものでもないだろ！？ しかも荷物を背負っているんだ！ 多分じつとしているから気づかれないだけで動けばきづかれやすくなる、絶対無理だ！」

「無理って言っな！」

ジャースの手の平が唸る、引っ叩かれた晶は吹き飛び地面に座り込んだ、その体勢が横座りになり、片手で身体を支えて打たれた頬を押さえている姿はスポ根漫画のヒロインである。

「なにするのよ！」

自分の姿勢を瞬時に理解した晶は思わず女言葉になっていた、しかし細い体つきとはいえ男である、ただ単に気持ちが悪いただけだった。

「やめろ、気持ち悪い」

「すみませんでした」

晶はすぐさま体勢を正座に戻し即座に謝る、ジャースの一声はとも威圧感があり、晶を見る眼は汚物を見るように冷え切っていた。

「とにかく、まだ祭壇まではまだまだ掛かる、その間出来るだけ教える、覚える！ いいな！」

「了解！」

ジャースの気合の籠った声に流されるまま晶は姿勢を正す、返事の後スパルタになりそうだと後悔するが後の祭りであった。

「だけど暗殺の技術なんてそんな簡単に教えていいものなのか？」

人に見つらないように闇に時には人ごみや自然物に紛れて殺していく技術である。

やり方が分かれると対策も取られやすくなり、故に門外不出とまではないにしろそう易々と教えることは無いだろう、

「別にに構わないさ、覚えたとしてもオレを殺すなんて十年早い」

どうにも腑に落ちない晶はしつこく問いただす、けんもほろろにされるばかりであったが晶は諦めなかった、というよりもだんだん楽しくなってきた。

いままで冷たい反応でしかなかったが、先ほど教えるといった時はどこか子供を相手にしているかのようなようだった。

問い詰めているときも雰囲気も少し柔らかくなった気がするのがある、しかし余りにしつこかったのか次の瞬間には首に刃物を当てられ黙ることになるのだった。

砂漠とはいえ二人だけしか居ない状況というのは自然と手を取り合うものである、やはり人間とは群れるものだからだろう。

晶が持っていた食料——乾燥した肉などの携帯食品——を二人で分けて食べたりしているとジャースに対して仲間意識を感じ始めている晶であった。

ジャースも大人しくしている晶に警戒心が薄くなってきているのだろう、二人の歩く距離は初めよりも近くなってきており、ジャースの態度も幾分柔らかくなってきていた。

その頃には晶は自分の一言で黒の牙を追い出された罪悪感と、気に掛けてくれる嬉しさとであることを話そうと決意する。

「ジャースさん」

「ん？」

「見てほしいがあるものがある」

晶が何処かへ手招きした後地面を指刺す、すると虚空から水が落

ち始めた、晶は水色の少女を呼び、水を出してもらったのである。

ちなみに最初の交渉時水袋を半分落としたのもこれが出るため、一人で砂漠を歩く時には水に困らなかったためだ。

「な！？ 今何をした！？」

突如空中から水を出したのである、しかも水が存在していない——もちろん水蒸気は極僅かにあるだろうが——砂漠で出したのだ、驚くのは無理もない。

「今から話すことは全て本当のことだ、軽蔑しないでくれるか？」

魔力は感じることも見ることは無理だが、そこかしこに居る少女が見えること、当然魔術が使えないが、少女に頼めば小さなことだが何か出すことが出来ること等、自分が見えたもの出来ることを全て話した。

「昼の日差しは強かったからな、どこかで休んでから行こう」

ジャースがやたらと心配しだした、どうやら暑さにやられて幻覚でも見ていると判断されたいらしい。

「大丈夫だつて！ 今話したことは本当だ！」

晶は真剣にじつとジャースと眼を合わせる。

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「そうか其処まで少女に——」

「飢えてもいないし！ 少女好きではない！」

勇達と同じこと反応をすると晶は予測していた、哀れむような表情をするジャースの言葉を遮って晶はつつこむ、目の前に卓袱台があれば思い切り引っ繰り返していただろう。

「そう思われたくないから、いままで黙ってたんだよ」

「そうかそうか、一応正常だと信じてやる」

「一応とか言っているあたりですでに少女好きと思われているよな……………」

頷きながら肩を叩くジャースの対応にガックリとうなだれる晶であつた。

「腹へつた……………」

「言つな、余計腹が減る」

晶は腹を擦りながら力ない声を出していた、聞こえたジャースは苛立ちを覚えているようだった。

実はタウロに存在を忘れ去られた晶の荷物に手をつけられなかった、一通りの物はそろっていたのだが所持していたのは晶一人分である、水は晶のおかげで確保できたが流石に食料は無理であった。

「祭壇まではあとどれ位で着く？」

「そうだな、歩きだからあと二日ぐらいか？」

月明かりを頼りにジャースが指を折り曲げ数えている。

「きついな」

体力持つのかと不安になった晶は月光に照らされたジャースの姿を見る、肌が見える部分から鍛えられているようであった、しかし晶と同じように全体に細くタウロ達のように筋肉達磨ではない、それなのに晶よりも大分余裕があるようだった。

筋肉がある分代謝が良く持久力が無いものである、ジャースの身体はどうなっているのかと思う晶は話の種とばかりに疑問をぶつけた。

「ジャースさんは細いのによく体力がよく持つな？」

「食い物が少ない砂漠で住んでいれば自然とそうなるな」

晶の質問にジャースは呆気羅漢に言い返していた、晶はそんなも

んなのかと納得しながらも人体の不思議とじつくりとジャースを観察していた。

突然晶の身体に軽い衝撃と倒れる感覚が襲い晶は咄嗟に目を閉じた。

「おい！ なにボーっとしてんだ？」

ジャースの怒気が箆った声に晶が目を開ける、そこには眉を吊り上げ睨むジャースの顔があった。

実はジャースが何かを見つけ止まり振り返って停止を促したがし晶はそれに気がつかずぶつかり押し倒したのだ、体勢を把握出来ていない晶は謝りながら上体を起こすがその瞬間ジャースの眼光が鋭くなった。

「てめえ」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

素早く離れた晶は地面にすりつけるように土下座する、晶が身体を起こしたときに地面に手を置いたつもりが焦っていたため押さえたのがジャースであった。

押し倒され混乱していたとはいえ起き上がるときに押さえつけられたのだ、ジャースが怒りを露にするのも無理は無いと理解した晶はひたすら謝るのだった。

脇役八

平身低頭でなんとか許しを得た晶は改めて前方を見ると砂ばかりの砂漠に何か動くものを捉えた、それは巨大な黄色い猪姿の魔物であった、それを見た瞬間晶の胃が動き空腹感が増す。

「チツやっぱり……グレートボアじゃねえか、一旦此处で待機だ、やり過ぎすぞ」

その魔物は厄介なのだろう、ジャースの声には苛立ちが含まれていたが、晶は返答しなかった、というよりも出来なかった、すでに空腹がかなり酷かったが食べ物を見つけついに限界に達したのである。

「晶？」

晶の様子がおかしいと感じたのだろう、再度ジャースが呼びかけるが集中している晶は全く反応しなかった。

「く……」

「は？」

うまく聞き取れなかったのかジャースは聞き返す。

「肉、豚肉、いやボタンか、ボタン鍋、または焼肉、乾燥して保存食、うまくいけばホルモン焼きとか、出汁に豚骨もいけそう」

ボソボソと口早にやばい言葉を発する晶は涎を拭く、デザートボ

アの見た目は黄色い体長三メートルほどの大きさとはいえイノシシであり、晶から見たそれはとても美味そうであった。

「ボタンナベってなんだ？ いやいや、そうじゃなくて、あれは魔物だぞ」

ゆっくりとデザートボアに近づく晶の言葉を、一部理解したようすのジャースは止めに入るが晶には関係なかった、いかに気付かれずに近づくか、いかに一撃で仕留めるか、飢えが限界に達した晶はこれを逃すともう食い物にありつけないと最高の集中を見せる。

刃物はジャースから素早く拝借し足音を立てないようにゆっくりと移動する、その際出来るだけ風下から近づき極限まで心を冷たく無心にした。

「嘘だろ！？」

得物があつた場所に手をやるジャースを眼の端で捉えたが晶は無視した、静かにだが素早く近づいた晶の目の前にはグレートボアの頭部がある、餌を取っているのか砂に鼻先を突っ込んでいるが耳がせわしなく動いて警戒している、しかし目の間に前にいる晶には気が付いていないようである。

ゆっくりと左手のダマスカスナイフを振り上げ体重をのせ振り下ろす、分厚い頭蓋骨を貫通する感覚が伝わると同時に、晶は駄目押しとばかりに右手のダマスカスナイフで首を掻っ切った。

重々しい音と共に倒れこんだデザートボアの身体が痙攣する、しかし数秒後には微動すらなくなるのだった。

人間命に関わるととんでもない能力を発揮するものである、ジャースの視界から消えて刃物を気づかぬうちに盗み、物音立てずに魔物背後に忍び寄る、そして的確に急所を切り裂いたのである

実はこのとき使用した暗殺技術は少し違っていた、ジャースの猛特訓を受けていた晶だったが多少は技術が身についた程度だった。

まだまだ実戦には使えなかったがそれもそのはずで、ジャースから教えた貰った暗殺技術は基本的に魔技術を使用したものなのであった。

魔力を全身に覆い周囲に溶け込むのだが晶は魔力を扱う才能が全く無い故に、全てでは自分の存在感の無さを最大限に発揮した暗殺技術だったのだ。

もっとも本人は空腹と食料に集中して気づくことなく、もう一度やれと言われたら命が掛かった極限状態にならないと出来ないだろう。

「フンフン〜ラリラリラ〜」

久々の食い物に嬉しい晶は陽気に鼻歌を歌う、しかしやっている事は結構グロテスクであった。

周囲は血まみれ、イノシシの解剖図が広がっていた、食えるように解体中である。

「なあ、本当に食うのか？」

ジャースは嫌そうな顔をしていた、野生のイノシシならともかく

魔物である抵抗感は物凄いのだろう。

「ん？ 無理にとは言いわないさ、でもオレは我慢で出来そうにないな」

晶は首をかしげる、その姿は顔についた血糊や血まみれの両手を動かしており、かなり残虐な人間に見えるだろう。

「そ、そうか……」

引き気味なジャースの頭に汗が流れる、そうこうしている内に解体終了、晶は火を焚こうと燃えるものを探すが砂ばかりの砂漠である、それといって燃えるものが無かったが晶は止まらなかった。

周囲を見回し目に留まったのは先ほど狩ったデザートボアだった、そして毛を剃ってかき集めたのである、あつという間に燃え尽きるかもしれないが大量にあるため、継ぎ足しながら燃やそうという魂胆であった、その場限りだが二、三人分は焼けるだろう。

晶は火をつけようと赤い少女を探すが見えなくて一人覗き込んでおり、物凄い期待に満ちた顔をしている。

「ああ、点けてくれるか？」

晶が頼むと嬉々として火種をだし魔物の毛が点火する、串にさした肉に塩を振り、火を点けた赤い少女を優しく撫でながらしっかりと焼く、すると美味しそうな肉の焼ける匂いが漂いはじめ、ポタポタと脂が滴り、脂肪や肉が焼ける音が食欲を誘う。

「上手に焼けましたー」

お腹を鳴らしながら晶は焼肉を掲げた、それはもう目を輝かせとても嬉しそうであり、もはや食うことしか頭に無い晶は遠慮なくかぶりつくのだった。

「いける！」

そう叫ぶと晶は猛然と食べ始めた、そんな様子をジャースは見つめていた、なんだかんだ言いながらもジャースもやはり空腹でなのである。

肉の焼けるいい匂いが刺激となり空腹感がさらに増す、目の前で美味しそうに食べられると流石に自身も食べてみたいと思うものがある。

（美味そう、魔物食うなんて考えもなかった、食えるのか？ 食うか？ いやしかし魔物だぞ、どうする？ どうする！？）

しかし食べているのは野生の動物とは違う魔物である、いままで魔物を食うということを思いもなかったジャースは心の中で物凄く葛藤していた。

口の中に涎が出て飲み込む、その音が聞こえたのだろう晶が振り向いた。

「どうぞ」

晶が串にさした焼肉を差し出した、空腹状態に目の前に肉汁が溢れる焼けた肉である、ジャースは手を出したり引っ込めたりと繰り返したが、やはり食欲にかなわないものである、そのうえ晶が実際に食べているのである。

「貰うぞ」

我慢出来なかった、気合と共に手を伸ばし思いっきりかぶりつく、その瞬間口に広がる美味しさに驚き眼を見開いて一気に食べ始めた。

「美味しいな！」

「だよな！」

同じ感想が嬉しいのか晶は目じりを下げていた、二人して次々肉を消化していく、晶は嬉しそうにしながら甲斐甲斐しく自分も食べながら肉を焼いていった。

「しかし魔物を食うなんて発想は無かったな」

満たされたお腹を擦りながらジャースは驚いていた、野生の動物とは違い魔力に侵された異常な動物である魔物を食す、という発想は初めてだった。

「この魔物がイノシシ姿だったのが幸いだったな、サソリとか昆虫型だったら食おうとも思わないよ」

腹が膨れて落ち着いてきたのか晶の顔は綻んでいる、しかしジャースは懸念することがあった。

「このことは周りには黙っていたほうがいいかもしれないな」

「そうなのか？」

真面目に話すジャースをみて真面目な話と理解したのか晶は姿勢をただす。

「魔物を食べるなんて誰も考えない、考えもしない、そんなものを食ったなんて言ったら、何されるかわからないぞ」

「あー、確かにそうかもしれないな、オレも他に食うものあったら食おうとも思わなかったからな、勇達に合流したら密かに処分しておこつ」

晶は焼肉以外にも保存用として干し肉用の肉も用意していた、砂漠なのであつという間に乾燥するだろう。

「あ、ああそうだな」

（そうだよな、こいつはあいつ等のところに戻るんだよな……）

ジャースの心に言いよの無い寂しさのようなものが浮かぶ。

「ジャースさん？　どうかしたのか？」

ジャースの返事は若干返事が弱いことを感じ取ったのか晶は心配そうである。

「ん？　なにがだ？」

そしらぬ顔で返すジャースは気のせいだとするのだった。

晶の目の前に砂の壁が立ちはだかっていた、その正体は砂嵐なのだが規模が巨大である、上を見上げれば途轍もなく高く舞い、左右を見渡せば地平線に消えるのかと思うほどに広がっている。

「これは、凄いな……」

凄まじい光景に晶は呆然とするばかりである、遠くで見つけた時は砂煙のようなものだったが、近づくにつれ壮大さがよく分かった。

「だろう、この中心に祭壇がある」

「中心……」

晶が視線を向けた先は砂嵐の中心らしき場所である、大量に舞う砂によって満月の光がさえぎられ暗くなっていた。

「其処を拠点にしていたんだ、だれも好き好んで砂嵐のなかに入ろうとする奴はいないからな、襲われなくて丁度いい場所だったさ」

この砂嵐は防御という点に関してはかなり有効だろう、黒い牙達の後を着け入り込んだ者も居るだろうが慣れていないと嵐の中で迷ってお陀仏の可能性が高そうである。

「行くぞ！」

「こ、心の準備が——」

あまりの光景に物怖じする晶だったが、ジャースが強引に手を引っ張られ砂嵐へと引きずられるのであった。

叩きつけられる砂と飛ばされそうな強風が晶を襲う、視界が悪く風音しか聞こえない状況を二人は進んでいた、この中で方向を見失えば生きて帰ることは非常に困難だろう、過酷な状況に晶は時間の感覚も狂いどれほど時間が経ったか把握できないでいる、しかし永遠と勘違いしそうな砂嵐も唐突におわりをつげた、突如風が止み視界も正常に戻ったのだ。

「抜けたぞ」

ジャースの言葉が聞こえ晶は周囲を見回す、其処には何かの遺跡らしき建造物があった、遺跡を中心に平穏な砂漠があるが、途中から先は壁の如く聳え立つ砂嵐が存在している。

「なんだこれ？」

呆気にとられた晶だったがそれもそうだろう、砂嵐がくつきりと境界線から遺跡側へ入ってこないのである、円を描くように渦を巻き、真上の丸い空の中心には満月が一つあるのみ、まるで竜巻の中心に居るかのような様相を呈していた。

「ほら、ぼさつとしてないで行くぞ」

「わ、わかった」

引っ張られ自分を取り戻した晶は後を着いていく。

「しかし勇達はまだたどり着いていないみたいだな」

「そうなのか？」

眉を顰める晶はまだ砂嵐があつたことから予測をたてていた、勇がたどり着いていれば砂嵐が晴れているはずだが未だ発生しているのである。

「それなら、多分着ているな」

晶の説明を聞いたジャースは砂嵐を見ながら反論した、なんで分かるのかと晶は視線で問うとジャースはいわく大分砂嵐が弱っている、勇者が来て砂嵐が止むというのなら、既にたどり着いて徐々に消えているのだろつということであつた。

「あの強さで大分弱まっているとか……」

ゲンナリする晶だつたがふと疑問がわく、猛風に飛ばされる砂は思った以上に危険である、晶も砂嵐の中では顔に砂が当たりかなり痛かった、大分弱つてそれなのだ、弱つていないなら傷もつくだろう、ジャースは細いから布で身体を覆るがタウ口達は筋骨隆々で完璧に覆そつにないのである。

「タウ口達は少しでも砂で傷つかないように身体に油を塗ってすべりを良くするんだ」

「あの気持ち悪いテカリにそんな意味もあつたのか！」

昔からある祭壇といわれているだけに、いかにも遺跡といった構造の廊下を二人は歩く。

「なあ」

「なに？」

「普通、出てくる魔物を倒しながら進むんじゃないのか？」

「はっはっは、無視できるモノは無視でいく、戦うだけ無駄だな」

やり方が違うとはいえ二人とも気配が消せるのだ、出てくる魔物は殆ど二人に気づかないのである、たまに気配に敏感な者には気づかれることもあるが、素早くジャースが始末して事なきをえていた。

「しかし誰も居ないな」

「いつものなら巡回している奴が誰か居るはずだが……」

「もしかしたら勇達が対処に追われているかもしれない」

勇達も歩きで祭壇にきているだろう、しかし晶がまだ人質に取られていると思っっているはずである、そうすると早くたどり着くために足早に移動してきた可能性が高い。

「おい、誰か来たぞ」

その時ジャースはなにか捉えたのか晶に注意を促す、二人は音も立てずに近くの小部屋へ隠れた。

「なんだ？」

ジャースは眉をひそめ困惑しているようであった、なにがあったのかと晶疑問に思うが直ぐ理解した、足音が聞こえたのだが軽く間隔が狭いのである、あまり体重の無い、歩幅の小さな足音、まるで子供のような足音であった。

こんな魔物と盗賊がいる場所に子供が居るわけが無のだ、しかし足音が大分近づき晶にも目視で判断できるようになった。

「なんでこんな所に!？」

晶が驚くもの無理は無い、居ないと思っていた小さな子供が居たのである、しかも何かに追われているのだろう、たまに後ろを振り返りながら必死に走っていた。遠くにはサソリ型の魔物が数匹見える。

「あれは……チツ仕方ないな」

「あ、おい！」

晶は子供に駆け寄る、後ろからジャースは止めようとしていたが無視した、たしかにこんな物騒な場所に子供である、何かが変装しているか畏の類の可能性が高かった、しかし晶には理由があった。

晶は子供を素早く抱きかかえ再度小部屋へと隠れるが子供を追い

かけていた魔物も晶が隠れた部屋に入ってくる、しかし晶には気が付かないようであった、部屋を見まわしていたが突如力が抜けたように次々と倒れこむ。

「晶！ いきなり何してんだよ！」

立ち上がりながらジャースは晶を睨みつける、晶を追ってきた所を後ろからジャースが殺したのだ。

「じ、ごめんなさい」

牙を剥くジャースの迫力に晶は縮こまって謝る、ちなみに子供は突然のことで呆然としたのか大人しくなっていた。

「実はこの子供を何処かで見た気がしたんだよ」

その子供は七、八歳で長く赤い髪を無造作にたらし無垢な赤い瞳を二人に向けていた。

脇役九

「どこかで見たって――」

ジャースが言葉を切り、喋るなと手で合図をするのを見た何事かと晶も耳を澄ます、すると今度は複数の走ってくる音が聞こえてきたのだ。

物音立てずジッしてやり過ごす晶、抱えられている子供も何か二人から感じるのだろう、大人しくしている。

「こ……きた……」

「はい……た……は……」

部屋の入り口まで来たのだろう、話声が僅かに聞こえたその瞬間に子供が飛び出していった、いままで大人しかったのだ突然の行動に晶は反応が遅れる。

「ユウ兄ちゃん！」

急いで晶が追いかけた先には、子供が嬉しそうに男性に抱きついている姿があった。

「勇？」

「あ、晶？」

子供を抱えた勇が不思議そうに晶を指差していた、連れ去られた

晶が無傷でうろついていたのである、不思議で仕方ないだろう。

「お前無事だったのか？ 捕まっていたよな？」

「えーと、あのあと――」

勇の質問に晶は身振り手ぶりを加えて今までのことを簡潔に説明した、ちなみに魔物を食した事は伏せている。

「そつか……ジャースだっけ？ 晶を守ってくれてありがとうな」

勇が礼を述べながら手を差し出すが、ジャースは一瞥くると顔を背けるだけだった。

「別にお前達のためにやった訳じゃねえよ」

ツンデレっぽい台詞だが鼻で笑うその態度と瞳は非常に冷たく、冗談抜きで本当にそう思っているようだ。

晶には大分心を許しているが、会ったばかりの知らない勇者達に對して警戒しているのは当然であろう。

「ええと、ところでその子は誰なんだ？ ユナさんに似ている感じだけど……」

なんとも重い空気を払拭しようと晶は話を変えるために、先ほどの子供の話を振る。

子供は髪や瞳の色そして顔つきがユナにとてもよく似ていたのだ、それが晶はこの子供を助けた理由である。

「この子はユナ」

「と勇の子か!？」

勇の言葉からつながる晶の顔は驚愕に染まる、自身が知らぬ間に勇の取り合いの決着がついてしまったのかと後悔の嵐が渦巻いていた。

「その通りだ!」

なぜか胸を張る勇の姿は頭を撫でている子供が、自慢の娘だといわんばかりの親ばかそのものである。

「晶さん馬鹿なこと言わないでください! この子はユナ本人です!」

そんな二人のやり取りを晶のみハリセンで思い切り張り倒すマリアだった。

「その子供がユナさん本人? どういう事だ?」

ふざけた雰囲気は晶は払拭しようとするが、タンコブこさえた状態では全くしまらないものである。

「簡単に言つと晶を探して手当たりしだいに部屋を調べていたら、ユナが罨に掛かったんだ」

真面目な顔して勇が説明する、しかし晶が吹き飛ぶ姿を見たせいかマリアが放ったハリセンの威力に戦慄しているようである。

「ああ、あの罨があつたな？」

思い当たる事があるのだろう、ジャースは顎に手をあて思い出しているようだ。

「知っているのか？」

「詳しいことは知らないさ、けど元からこの遺跡あつた罨に、ガキになる煙が発生する場所があつたな」

晶が聞くがジャースは首をかしげながら答えるだけであつた。

「直し方……知っている……？」

「いや知らないな、その煙に巻かれる奴は大概侵入者だから殺していたし……　　そういえば殺したからか、それとも時間で効力が消えるのか、元に戻っていたな」

メイが心配そうにユナを撫でながら聴くが、ジャースは肩をすくめるだけである、たしかに侵入者をわざわざ戻す意味は無い。

「マリアさんの魔術は？」

回復できるのならこういった解呪系の魔術もあるはず、そう考え晶は聞いてみるが反応は芳しくなかった。

「残念だけどだめだったな」

「す、すみません……」

青ざめた顔でマリアは勇へ謝るが、勇は気にしないと頭をなで慰める。

「時間の経過を待つしかないみたいだな」

仲間意識の薄いジャースと子供のユナ以外は勇の意見に同意するように、肩を落とすしかなかった。

「ユウ兄ちゃん、この人誰？」

暗い雰囲気の中ユナの明るい声が聞こえた晶は振り向くと、晶を指差すユナの姿があった、どうやら記憶も子供の頃に帰っているらしい。

「こいつは晶、俺の親友だ」

ユナを抱きかかえながら勇は紹介する姿はまさに親子である。

「よろしくな」

「うん！」

晶は笑顔で挨拶する、その姿にユナもにつこりと笑顔を向けて元氣よく答えた。

「小さい頃はこんなにも愛嬌があったんだな」

ユナの笑顔振りまく姿から晶は感慨深げになっていた、会った時から毅然とした態度のユナからは想像も出来ない無邪気で天真爛漫

な姿であつた。

「初めて会ったときは……すでにあなっていた……」

頷くメイも同意しているのか何度も頷いていた。

「こんな可愛げある子供がなぜあんなにも堅物な女傑になるのか……」

晶の不思議そうに漏らす言葉をもらすのだった。

「おい勇者、今から祭壇いくんだろう？　だったらオレが道案内してやる」

突然の意見に勇は眉を顰めるがそれもそうだろう、晶に友好的でも勇達にはそれ程でもない、それなのに道案内するとはどういうことか？

「別にお前達のためにするんじゃない、タウロにお礼参りしてやるうかと思つてな」

ジャースが黒い笑みを浮かべる、殴られたことも腹に据えかねているのか、腹部に手を当て米神に血管が浮き出ていた。

「どういうことだ？」

まだ納得できないのか勇は不安げである。

「タウロはお前達が祭壇目指すことを知っていたからな、そこで待っているだろう。たどり着く頃には畏や魔物でボロボロの勇者達を迎え撃つ、そう考えているはずだ。そこで畏の位置も知っていてなおかつ戦力になるオレが案内してやる、それ程勞せずにとどり着けるはずだ」

どうするかとジャースは全員に眼で問う。

「畏に嵌めるために誘導する気が」

「はん！ 別に信じなくても構わないさ、オレ一人でも行くからな」

勇は腕を組んで悩んでいた、それもそうだろう妙に気を許している晶と一緒にいるとはいえまだ信用できない、しかしジャースに案内をさせれば比較てき安全に最短距離でいけるかもしれないのだ。

「だけどいいのか？ 襲ってくる奴らにはお前の仲間も居るんだぞ」

勇達が入ってから魔物のみならず黒い牙も含まれていた、共に歩くとなると当然襲われるだろう。

「かまわないさ、晶が説明したようにすでにあいつらは仲間じゃないしな、裏切り者に容赦なんぞしない」

ギラついたジャースの瞳から本気で思っているようだった。

「オレは賛成だ、ユナさんが今子供だからな、少しでも戦力があつたほうが良い」

晶は理由を述べながらも、心の中では何故かジャースと離れがた
く思ったことに内心首を傾げていた。

（なんだろうな？ こう……友人でもなく仲間か？ それもなんか
違うな……なんだかもっと大切な感じ……そう……惚れ）

頭を振って無理やり思考を晶はやめる、なにか気が付いてはなら
ないと猛烈に感じたためである。

「それは……言えている……私も……賛成……」

「勇者様の意見に従います」

「よし！よろしく頼む」

メイもマリアも賛成、断る理由もないようである、よってジャ
ース案内のもと祭壇へと向かう一同であった。

魔技術で気配を消したジャースが首を切り裂いた、トカゲの魔物
からすれば唐突に首をかかれたようであろう。

後ろから気付かれずに近づき仕留めるジャースの姿はまさに死神
であった。

その死神は次々とダマスカスナイフで獲物を掻っ捌き、死を振り

まいていく、だからといって他の魔物達は回りに気をそらすわけにもいかないだろう。

目の前には暴虐なまでに破壊を行う白い鎧を着た勇と天変地異を起こす悪魔な魔女のメイ、そしてそれらを癒す女神なマリアが居たからである。

最強と信じていただろう魔物の心を易々と打ち砕き、いままで続いていた命を止める出来事であった。

「終わったか？」

晶は隠れていた場所からひょっこり現れる、背には荷物、腕の中には大人しくしているユナの姿があった。

魔物に襲われるたびに物陰に隠れ、ときには壁際でどうかするように息を潜めながら晶とユナは気づかれないうちに隠れていた。

「大丈夫みたいだな」

「ああ、ユナさんも大人しくしてくれてたからな……ユナさん？」

無事を確認するジャースに答える晶だった、しかしユナが落とんでいるようだったので降ろして向き合う。

「どうした？」

「えっとね、その、ごめんなさい」

突然勇達に謝るユナに疑問を浮かべる一同。

「ワタシ戦う力が無いし、皆さんの迷惑になっているから……」

気を落とすユナは、足を引っ張るお荷物状態なことが申し訳ないようだった。

「気にするなつて、子供は大人しく守られてればいいんだ、どうか守らせてくれ、子供に戦わせるのはこっちが情けなくなってくる」

勇は身を屈め視線を合わせ、優しく微笑み頭をゆつくりと慈しみながら撫でている。

「どうしても守られるだけは嫌だったら、成長して守られた分皆を守ってくれないか？」

ユナが将来騎士になる確率はかなり高いのだ、騎士になって多くの人々を守るようになれるということだろう、ユナは勇の瞳をジッと見つめ元気よく頷いた。

「わかった、ワタシ大きくなったら、勇お兄ちゃんみたいにカッコよくて強い人になる！」

天真爛漫に宣言するユナであった。

「み、耳が痛い」

一方そんな様子をしゃがんで眼をそらす晶は情けなさ抜群である。

「あんな小さい子供が戦えなくて迷惑って思っているのになー」

見下ろしニヤつくジャースはやたらと楽しげであった。

「オ、オレも申し訳ないと思っているさ」

晶は反論するもジャースの言葉が痛く勢いが無い。

「ほほう、存在感の無さからのんびりして」

「暢気に戦場覗き込んで」

「緊張感のかけらも無い」

ジャースの一言一言に押され晶はどんどん縮こまっていく。

「そんな男が申し訳なく思っている」と！

晶を言葉で攻めるジャースは非常に楽しそうであった。

「よし、いくか！」

勇の掛け声と共に歩き出す、案内役のジャースが先頭になり続いて接近戦の勇、その後ろには勇を補助するマリアと続き、安全のために中央に子供のユナと荷物持ちの晶、そして最後尾に遠距離可能なメイとなり、魔物の死体が転がる場所を進みだす。

その時ユナの視界の隅で何かが僅かに動くのを捉えた、一瞬目の錯覚かと思ったが次の瞬間蛇型の魔物が飛び出したのだ。

「危ない！」

直ぐ後ろを歩いていた晶は危険を促す声をだしながら腕を伸ばそうとし、その声に反応し全員が一瞬のうちに現状を把握した。

死んだ振りが気絶して今日が覚めたのか、魔物の死体に隠れるように出てきたため先頭を歩くジャース達は気が付かなかったのだらう。

「――！」

ユナは声にならない悲鳴を上げるが、逃げ出そうにも恐怖で体が震え動けないでいるようだった、周りも守ろうと行動に移すが蛇型の魔物が僅かに速い。

しかしその凶暴な牙が届くことは無かった、魔物の頭部を貫いた煌く刃があったからである。

その刃はバスタード・ソード、刃を持つ人物は肩膝を着き、優雅に赤い髪をなびかせながら凜とした雰囲気を持ち、先ほどの天真爛漫な無邪気な子供の姿から凜とした女性に変貌していた。

一瞬のうちに魔物を細切れにした者の名はユナ・キ・ロードであった。

「ユナ！」

勇、マリア、そしてメイが駆け寄る。

「どうやら、戻ったみたいだな」

ユナは元に戻った身体を動かしながら見回していた。

「どれぐらいまで覚えている？」

勇が傍に近寄り子供の頃の記憶があるのか聞いていたが、ユナは緊張で身体の動きがぎこちなくなっていた。

「ああ、ええっと、煙に巻かれた辺りから、き、記憶は無いな、うん、無い」

「ん？　そうか、じゃあ説明するな」

ユナのぎこちなさが勇は気になるようだったが現状を説明し始めるが、その間ユナは緊張しっぱなしであった。

その後マリアによってユナの体に異常が無いことを確認した一行は先へ進む。

後ろからの襲撃に備えて、最後尾に回ったユナはブツブツと自分に言い聞かせるように独り言を言っていた。

「まさかあの煙が子供の自分呼び出すものとは……小さい頃あこがれた騎士様が、す、好きになったお兄ちゃんが勇殿……ど、どうしよう？」

ユナが騎士になったのは子供の頃に一人の騎士に憧れそして目標

にしていたのだ、当時周囲に聞いてもそんな騎士はいないと言われていたがようやく納得してきた。

実はユナが掛かった罫はかなり特殊で高度な魔術がかけられていたのだ、子供時代の自分を現代に召喚して、本人に重ねるといったものである。

時間の経過と共に解除されるが子供の時覚えたことは、元の時代に帰っても忘れることがなかった。

「どうしようも無いのでは？」

「うひゃあ！」

誰も聞こえていないと思っていたところに、突然晶が話しかけれユナは盛大に驚く。その声に何事かと先行する勇達は振り返るが、なんでもないと首を振ったあと晶に顔をむけ声を潜めた。

「晶殿！ 驚かすな！」

「それは無理だな」

影が薄い晶がどのタイミングで話しかけても驚かれるのだ、そのことを理解したユナは言葉に詰まるだけであった。

「そんなことより……」

意味深げに言葉を切る晶。

「好きになったお兄ちゃんが勇、とな？」

晶に言われ瞬間にユナは真っ赤に染まる、ある意味告白の様なものを聞かれたのだ恥ずかしくて堪らなかった。

「き、貴様聞いていたのか!？」

「ええ、もうバツチリ」

晶は物凄く楽しげな笑顔であった、しかしその笑顔には何かあら黒いものをユナは感じ嫌な予感がして、脳裏に浮かぶのは晶が自身を伺いながら勇と楽しく話す姿である。

「こ、このことは勇殿にはだまってくれ!」

勇にはれるのが恥ずかしいユナは必死に懇願する。

「ああ、いいよ」

「ほ、本当か!？」

願いが通じたユナは喜びにパツと顔が輝く。

「はい、なんだったら勇とうまくいくように色々お教えあげようか?」

「む、それは嬉しいがなぜ其処までしてくれる?」

晶の言葉を怪しむユナであるが無理もないだろう、ユナから何か報酬をやるわけでも無くここまでやるのだ、なにか裏があると勘ぐるのが当然であろう。

「オレは勇の親友だぞ、親友の幸せになることを考えるはあたりまえだろう?」

「それはすまなかった、晶殿は心から勇殿の親友なのだな」

真剣な顔で話す晶にユナは納得し、親友の幸せを考えての行動だと感動するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6397w/>

脇役

2011年10月30日21時14分発行